
とある六位の無限重力<ブラックホール>

陰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある六位の無限重力>ブラックホール<

【Nコード】

N6696Y

【作者名】

陰

【あらすじ】

学園都市LEVEL5序列第三位、御坂美琴には、兄がいる。名は御坂美影。彼もLEVEL5で序列は第六位。しかも彼は学園都市最強の唯一の「親友」である。

主人公設定（前書き）

初小説です

主人公設定

名前 御坂美影

身長 180cm

体重 60kg (操作可能)

能力 LEVEL 5 無限重力＞ブラックホール＜ 序列六位
書庫に載っている内容

- ・重力子による金属の爆発
- ・物体にかかる重力の操作
書庫に載っていない内容
- ・重力操作は反応する物質を限定できる
- ・重力探知

美影がもつとも頻繁に使う能力。最大半径5km内を一度に視ることが可能。範囲が狭ければ原子サイズで探知できる。

・ブラックホール

ブラックホールにより、あらゆるものが吸い込める。威力が強すぎるので使うときは必ず威力を抑える。剣や壁の形にできる。

・ワームホール

強力な重力により空間を捻じ曲げて穴を開け、それを通り移動できる。その気になれば地球の裏側に出口を作れる。

・????

備考

かなり顔は整っていて、ほんの少し美琴に似ている

運動神経抜群

ハッキングはウィザード級

料理はプロ級

アタセレータ

一方通行とは親友

かなりポーカークフェイスで動揺が顔に見られることはほとんどない
(喜びなどは表情に出る)

自分が有名になること、目立つことを嫌う

主人公設定（後書き）

これは長い間、書こうか迷っていた小説です
精一杯がんばります

Prologue

学園都市

東京西部を一気に開発して作り出され、一部を神奈川や埼玉に及ばせながら東京都の中央三分の一を円形に占めている。周囲が高さ5メートル・厚さ3メートルの壁で囲まれている上に、街全体を三機の監視衛星が常に監視している。

その名の通り学生が多く生活していて、その割合は全体の8割を占める。

この町では世界中探しても他にはないものが存在している。

それは、「超能力」。

学生たちの脳を研究し、一人につきひとつの能力を発現させている。

その種類は千差万別。多くの者に発現する能力もあれば、オンリーワンな能力もある。また、研究者がまったく理解できていないような能力も星の数^{レベル}の度ある。

能力には階級^{レベル}があり、0から5まで存在している。しかし、今だ該当するものはいないがLEVEL6（無敵）というものもあるといわれている。



季節は冬。第7学区のとあるファミレスにとある二人の少年がいた。

「お前よくそれで生きていられるな、アクセラレータ 一方通行」

片方の少年は向かいに座っている少年の光景を見て思う。

アクセラレータ 一方通行と呼ばれた少年は白い髪、白い肌、おまけにわずかに赤い眼をしていていわゆるアルビノの体質であり、また腕は年頃の少年とは思えないほど細い。

その体形から是不健康だと思われかねないが彼の目の前には大きなステーキとコーヒーの二つしかなく、健康を気にしているとはまったく思われない。

「うるせエなア、美影。好きなものを食って何が悪いんだよ。お前なんて何にも食ってねエじゃねエか。」

アクセラレータ 一方通行が言うように美影と呼ばれた少年の前にはコーヒーしかない。

「俺はもう家で食べたんだよ。お前が『腹減ったから飯行こうぜ』なんて突然電話するから俺は仕方なくここにいるんだから。」

美影はいやそうな顔で言う。

彼の言うとおり、一方通行が研究所での用事が終わり、時間的にも気分的にも空腹であったため強引に呼び出したのだ。

アクセラレータ 一方通行の見た目以外、普通の少年たちのように見えるが実際は違う。

彼らはこの学園都市が誇るLEVEL5であり、研究者たちにとってのどこから手が出るほどの逸材である。

しかも一方通行はその中でも序列一位。つまり、この町の頂点である。

対する美影、フルネームは『御坂美影』で序列は六位。一方通行と比べるとその肩書は見劣りするがLEVEL5というものの自体7人しかいないので十分凄いとと言える。

今この場にLEVEL5が二人もいるとわかったらいったい何人が驚くだろうか。そんなことを美影は思う。

「つうかお前が持ってきたその封筒は何なんだよ。」

一方通行は美影の脇においてある封筒について不思議に思いながらコーヒーが入ったカップを口につける。

「ああ、これ？ お前の入学申込書。ついでに持ってきた。」

さらっと言ったその言葉に驚き一方通行はコーヒーをふきだす。

「ゲホッ、ゲホッ、・・・はア？、なんの冗談ですかア！？この俺に学校に行けっていうのかてめえは。」

一方通行は息を整え言う。

そもそも一方通行にとって学校とはあってないものである。小学校には行っただけで彼だけのためにある特別教室がかわりにあった。現在15歳であるが中学校にも行っていない。

「まあいいじゃん行っても。高校ぐらい行こうぜ。俺も行きたいし。」

実は美影も現在中学には行っていない。毎日能力の研究や、一方通

行のわがままを聞いたり、『仕事』をしたりしている。

「どこの学校なんだよ。」

一方通行はとりあえず詳細を聞く。

「18学区の長点上機学園」

「へエ、あのエリート高か。」

一方通行が言うとおり長点上機学園というのは能力開発において学園都市ナンバーワンを誇る高校であり、学園都市に所属する全学校が合同で行う超大規模な体育祭である大覇星祭において今年の優勝校である。

「興味持った？」

「ぜんぜん」

美影の質問にアクセラレータは無愛想に答える。

「いいじゃん高校生活。しかも来年は第二位と第七位も入学するらしいし。」

「へエ、そいつはおもしろそうだな。」

ようやくわづかながら興味を持つ一方通行。
そんな彼に美影は最後の一手をかける。

「それにさ、俺が入学したらLEVEL5で学校行ってないのおま

えだけになるし。おまえだけ寂しくひとり家に引きこもっていいのか？」

「てめエ、ケンカ売ってんのか？」

「お前とケンカなんて二度としたくないよ。」

一方通行のことをばを美影は軽く受け流す。それに対しなんの反応もないところを見ると一方通行も本気ではないようだ。

「で、どうなの？」

「………まアいいぜ行っても。第二位ってのもおもしろそうだからなア。」

迷いながらも承諾する。美影はずっと脇においてあった資料の入った封筒を手渡す。

一方通行はそれをやぶり、中身を取り出し一枚一枚ペラペラとめくっていく。適当に眺めているようだが、驚くことに彼は一字一句逃さずすべて頭の中に入れていた。

「その一番下の紙、今月中に郵便局に書いてだしておけよ。」

一方通行が持つ紙の束を指差しながら言う。

一番下の紙だけは空欄が多くなっているようだ。

「へエへエ、わかりました。」

念を押すように言う美影にわざとらしく返事をする。
だが、

（こういうのもわるくねエか）

と内心面白そうに思っていた。

この物語は彼らの入学から始まる。

P r o l o g u e (後書き)

評価お願いします

幕間一巻き込まれのち解決一

（あーあ、めんどくせえ・・・）

一方通行アクセラレータへの高校生活の勧誘があった翌日、御坂美影みさかみかげは歩きながら思う。彼の手には昨日一方通行に渡したものと同じ入学申込書がある。

なぜかという一方通行は昨日ファミレスで入学についての資料を読んだ後、各テーブルに一本ずつあるアンケート用のボールペンを使い願書を書き、『めんどくせえから出しとけ。』と強引に押し付けられたからである。

そのため、冷たい風が吹くなか、美影はグレーのロングコートと黒のマフラーを着ながら郵便局を目指しているのであった。

（まあ、いいか。正直書いてくれるとは思わなかったし。）

実は昨日の一方通行への勧誘は半ば駄目元のものであった。彼のことをよく知っているぶん、学校には興味を示さず今までどおりの生活が続けるものだと思っていた。

そんなことを考えながら歩き続けること約15分、左手に郵便局が見えてきた。

（あれ？ 閉まっている。）

郵便局は定休日であるかのようにシャッターが下りていている。今日は休みではないことを知っていた美影は不思議に思う。

シャッターとにらめっこをしていると、彼の横にとある少女が突然現れた。



美影が郵便局にたどり着く少し前、第7学区の街角にとある二人の風紀委員ジャッジメントの姿があった。

「何か気になったことや聞きたいことはある？」

端末に巡回報告を打ち込みながら、眼鏡をかけた、二人のうち先輩である、固法美偉このりみいは後輩に問いかける。

「……では、少しお聞きしたいのですが」

「なに？」

固法に問い掛けられた後輩、白井黒子しろいくろこは口を開く。

「風紀委員になって一年にもなりますのに、何でわたくしに任されるのは裏方や雑用、先輩同伴のパトロールばかりなんですか？」

日々抱いていた納得できない疑問を吐露した。

教職員で構成される警備員アンチスキルと呼ばれる組織と共に学園都市の治安を守る機関である風紀委員ジャッジメント。白井はその一員となり、風紀委員第一七七支部に配属されたのもう一年も前の話。

裏方や雑用も重要な仕事ではあることは彼女も十分わかっている。しかし、学園都市の平和を守るために風紀委員を志願した彼女にとって、仕事があればかりと言うのは不満以外の何ものでもなかった。

「成績優秀な自分が半人前扱いされるのが不満？」

固法は微笑みながらそう問い掛ける。

「そ、そういう訳ではありませんけど……やはり、わたくしが小学生だからかと……」

拗ねるように答えながら、顔を伏せる。固法はその伏せられた頭に優しく左手を置く。

「年齢だけが問題じゃないわ。あなたの場合、なまじポテンシャルが高い分、全てを一人で解決しようとするきらいがあるからね」

優しく固法は言葉を続ける。

「もう少し、周りの人間を頼るようにならないと危なっかしいのよ」

とは言うが、やはり今一納得がいかないらしい黒子はむう、と小さく唸る。

そんな少々意地っ張りな後輩の頭を固法は左手でよしよしと撫でた。

「そんな顔しないの。たくさん頑張ったご褒美に何か甘いもの奢ってあげる。お金下ろしてくるから少し待っていてね。」

そういつて、固法は郵便局へ入っていく。

やっぱり子ども扱いされている、と黒子は不服を抱きつつ先輩の後を追った。

ATMの列に並ぶ固法を見ていた黒子は、他の利用者の邪魔にならないように少し離れた位置で固法を待つことにした。

しかし、待っている間に特にすることも無いため、黒子は所在無げに局内を見回す。

時間的になのか郵便局の利用者は少ない。

「あ、白井さん！」

郵便局内を見回していた白井へ不意に聞き覚えのある声がかけられた。

「偶然ですねー」

「ういはる初春？ 何故あなたが第七学区に？」

振り返った黒子寄ってきたのは、花の髪飾りが特徴の風紀委員志願生、ういはるかざり初春飾利であった。

少し前に行われた風紀委員志願生向けの秋季訓練。そこで白井と風紀委員志願生である初春は知り合った。

だが、とくに連絡をとっていないので、今日この場で遭遇したのは偶然だ。

「もうすぐ中学生だし、学校や寮の下見に来たんです」

「……中学生？ どなたがですか？」

初春の言葉を聞き、黒子は思わず首を傾げる。

「へ？ 私に決まってるじゃないですかー」

やだなー、と笑いながら初春は答える。

「へ、へー」

（……お、同年でしたの？）

自分よりも幼く見えていたのか、てっきり初春が自身より二、三歳年下とばかり思っていたようだ。

その心情をきずかれないように彼女は声を裏返させながらも相槌を打つ。

しかも彼女たちの年齢的に年のわずかな違いは見た目に現れにくい。

「ところで白井さんはもう何処の中学に行くか決まったんですか？」

それからは話題が変わった。

「え、ええ、常盤台中学というところに」

今だ初春が自分と同年であるということに動揺しつつ、自分が進む学校を言う。

「ええ！！」

その言葉に初春は過剰に反応し白井に尊敬のまなざしを向ける。その変わりぶりに白井は若干たじろぐ。

初春は常盤台中学に対して羨望の的であったようだ。しかし白井は初春の憧憬とは180度逆のことを毒舌で言い、初春の幻想を殺

しつつあった。

「そういえば、あなたは郵便局に何を……」

そう言いながら、お金を下ろしている固法のことになり、視線を向けた白井は気がついた。

「どうしました？」

「ちょっと失礼」

白井の様子に気づき、初春が問い掛けるが、黒子は一言断り、目つきが変わっている先輩に近づく。

「どうなさいました？」

小声で固法に問いかける。それに対し固法は、静かに、と指を口に当てながら同じく小さく指で指しながら、

「あの男、さっきから職員の位置と視線ばかり気にしてる」

と、白井を郵便局の受付の近くに立つ肩にスポーツバッグをかけ、ニット帽をかぶった男に注意を引かせる。

その男は確かに挙動不審で周りをよく観察している。

「他人の持ち物を無断で透視するのは気が引けるけど」

と、言い、固法はその男を凝視する。

クレアボーアンス

彼女の能力透視能力である。これを使えば、鞆の中身などを相手に気づかれず見ることができる。この能力は風紀委員をやる上で便

利な能力と言える。

（妙な物は持ってないようね……）

スポーツバッグ、ズボンのポケットなど次々と男を透視していき、最後に上着のポケットを透視する。

すると上着の右ポケットにはあってはならないものがあつた。

「！！……右ポケットに拳銃！」

「強盗ですよ！？」

固法の言葉に小さく驚きの声を上げる黒子。

ATMがある郵便局に拳銃を持ってくるなんてそれ以外に考えられない。

「局員に伝えてくるわ。あなたは万が一に備え、利用客の誘導準備を……」

「逮捕しませんの！？」

「馬鹿なこと考えちゃ駄目よ。犯人の確保は警備員に任せなさい」

固法は厳しい声で制すると、局員に知らせるためにカウンターへと向かう。

だが、白井は納得していなかった。

（そんな消極的な……！）

黒子が思ったその時、パァンツ！という乾いた銃声が局内に響き

渡った。

その音で郵便局内の人全員が黙る。その状況が理解できていないものもちろほらみられる。

「お、おかしな真似すんなよ。お、おお客もあまり騒がないでくれよな。」

声を震わせ、忠告する強盗犯。拳銃に慣れていないのか、強盗することに極度に緊張しているのかその手はいやな汗で濡れている。

（くそお・先に動かれた。）

固法はもう少し早く気がつき行動していれば、と後悔するがもう遅い。

次の対処法を考えている中、先ほど忠告した後輩が誰よりも早く行動した。



白井の独断専行により、郵便局内はさんざんな状況になってしまった。

先輩である固法は白井を庇い、怪我をして倒れてしまっている。しかも初春がもう一人の強盗犯により人質となってしまう。

（わたくしのせいですの……なんて様ですの。……これでは半人前以下ではありませんか……。）

白井は深く、深く後悔していた。自分が作り出してしまった、その悲劇に。

固法の忠告にしたがっていたら結果は必ず変わっていたはずだ。

白井が予期していなかったもう一人の強盗犯はあきれた表情をしている。

「あのバカみてえにおれもやれると思ったのかよ。」

白井によって倒された共犯をみてはき捨てるように言う。どうやら共に犯罪をしていたがそれほど協調性はなかったようだ。

強盗犯は白井の足を踏み行動を封じる。白井はその痛みに苦しむ。初春はそんな白井を見ていられなくなり、何とかしようとするが強盗犯に片手でさえぎれる。初春は強盗犯に叫ぶが聞いてもらえない。

そのとき、初春は足に圧迫感を感じる。見てみると白井が足をつかんでいた。

「……必ず、助けて見せますの……。」

白井は力を振り絞り、自分の能力である空間移動テレポートを使う。



(……突然現れたってことは空間移動テレポートか?)

美影は初春を見ながら思う。その少女の様子から郵便局内で

はかなりの騒動になっていると窺える。

「・・・え？・・・外？・・・はっ白井さん！中に居るんですか！
？ どうして私だけ！」

初春は自分の状況を理解し、ガシャガシャとシャッターとたたく。
だが外にいる自分は何もできない。

美影は目の前の少女からだいたい出来事を予想する。そして重力操作によりなかを視て、状況を把握する。

「お、お願いします！助けてください！中には強盗がいて、白井さんが！」

動揺のあまり呂律が回らないようで、涙でよく顔が見えないながらも何とかして近くにいた美影に伝えようとする。

誰でもいいから助けてほしいと。

「・・・うん、わかった。」

「え？」

美影に初春の気持ちがよく伝わったようで軽い口調で引き受けた。

「俺が助けるから、落ち着いて。」

美影は初春の頭を撫でながら言う。

そして自身の目の前にワームホールを展開し郵便局内と空間をつなげる。

初春は目の前の現象に疑問を持つがそれにかまわず、美影は前へと進んだ。



中に取り残された白井は一人強盗犯に対峙していた。

初春を逃がしたため人質はいない。あとは警護員が来るまで時間稼ぎをすればいい。

「おまえが何を考えているのか当ててやろうか？」

強盗犯は白井の思考を見透かしたように言う。

「警報が鳴って大分経つ。そろそろ警備員も来る。人質を取られないようにコイツ足止めできれば、こちらの勝ち……凶星だろ？」

言い当てられて、くっ、と言葉を詰まらせる。

「だがな。ここから出られないと決まった訳じゃあないんだぜ？」

強盗犯はずっとポケットに入れていた手をビー玉サイズの鉄球と共に取り出す。

そして、その鉄球を防犯シャッターにむけて軽く投げる。

「絶対等速」イコールスピード

俺が投げたそれが壊れるか能力を解除するまで前に何があっても進み続ける。……これぐらいの壁、どうってこともねえんだよ。」

投げた鉄球は男の言うとおり落ちることなく進み、防犯シャッターの前にあるガラス窓の前に当たろうとしたとき、

「じゃあ、それ壊せばいいのか。」

二人が聞いたこともない声が不意にかけられ、鉄球が突然消えた。二人は驚き、その声をする方向へと目を向ける。そこにはいままです郵便局内にいなかったグレーのコートを着た少年、御坂美影がいた。

「ッ、なんだおまえは!!」

「ただの通行人Aです。」

自分の能力が簡単に止められ、動揺した強盗犯が目の中の男に叫ぶ。

が、適当に返事され、余計に怒りが増す。

（この殿方、いったいどうやってここに？）

自分と同じ空間移動が能力かもしれないと考えるが、それでは鉄球を消し去ったことの説明がつかないと思い、疑問が増す。

「くっ、だが、一個ぐらい消したからって調子の乗るなあ!!」

強盗犯は一気に10個ほどの鉄球を投げる。速度は低いが威力は絶大だ。

「まったく、あぶねえなあ・・・」

美影は飽く迄冷静に向き合い、先ほどと同じように、ブラックホ

ールでそれらを消し去る。

局内は薄暗く黒いブラックホールは見えにくい。鉄球が確実に消えていくのは目視できる。

「くそお!!」

強盗犯はまたも能力が防がれて動揺する。

すると、能力では太刀打ちできないと思ったのか、美影のほうに走り、殴りかかろうとする。

が、美影は走ってくる強盗犯に手をかざし、男にかかる重力を操作し、壁に落とした。

男は頭を打ったせい、壁にぶつかって美影が重力を元に戻したら力なくずるずると床に落ちた。

幕間一反省のち約束一

白井黒子しらいくろこは目の前の光景に驚愕していた。

突然現れ、自分が初春を逃がすことしかできなかった相手を意図も簡単に倒してくれた

その救世主ヒーローのような少年に。

「大丈夫か？」

美影が安否を問う声で白井は我に返る。

「は、はい・・・助けていただきありがとうございます。・・・ッ!!」

白井は立ち上がろうとするが強盗犯に踏まれた足が痛み顔をしかめる。

「あまり大丈夫じゃないだろ。早く医者にみてもらえよ。あそこに倒れている人も。」

壁の近くに倒れている固法美偉の方を見て言う。血を流しているがあまり深い傷ではなさそうで、すぐに治療してもらえば問題なさそうだ。

「今回のことはわたくしの独断専行が原因ですの。本当にありがとうございます。」

頭を下げ、再度感謝の気持ちを伝える白井。

真剣に感謝されることに慣れていないのか美影は少し困った表情をする。

「礼なら外にいる子に言えよ。君の事を本当に心配して助けを呼んでいた。」

「初春が？」

美影がここに来た経緯を話し、白井は自分が初春をテレポートさせた方向を見る。

「わたくしのせいで初春も危険な目にあわせてしまいましたの。責任はわたくしにあります。・・・これでは風紀委員^{ジャッジメント}の風上にも置けませんの。」

白井は深く反省し、弱音を吐く。このままではいけない、と。

「いいんじゃないのか？これで。」

「なっ・・・どういことですの！？」

白井は美影の無責任とも取れる発言に対し叫ぶ。このままではいけないと思っているのに真逆の発言されて過剰に反応している。

「そうやって反省できるってことは次から改められるってことだろ。人間生きてれば必ず失敗するけれどそこから何かを学べられるのやつは思いのほか少ない。」

でも君はそうやって自分に足りないことがちゃんと見つけれられたんだ。それは成功することより大切だと俺は思うよ。」

諭すような口調でやさしく微笑みながら美影は言う。不思議とその言葉は白井の心に染みた。

美影が話していると外からサイレンのような音が聞こえる。どうやら警備員が騒ぎをかぎつけ来たようだ。

「もう大丈夫そうだから行くね。」

美影はここに来た時と同じ方法で立ち去ろうとする。しかし、それをさせまいと白井は美影のコートをつかむ。

「ちょッ、離せ！」

「だめですよ、あなたは重要参考人！。ここで帰らせるわけにはいきません！」

美影は引き剥がそうとするが、いきなり風紀委員らしくなった白井に正論を言われながら止められる。

このままでは事情徴収などの面倒なことになってしまうのでなんとかこの場から離れようとする。

そこで能力を使い、白井にかかる重力を出鱈目に変化させ、バランスを崩させる。

突然目が回ったかのような感覚に陥り、思わずコートを握る手を離してしまった。すると、そのチャンスを逃さないようにすばやく走り出す。

「くっ、・・・あっ・・・せ、せめて名前を教えてほしいですよ！」

このままでは逃げられてしまうのでせめて恩人の名前だけでも聞こうとするが、

「お大事に〜〜〜。」

その問いに答えは返って来なかった。

美影はワームホールを展開し、そのまま走り抜けていった。薄暗いため白井にはワームホールがみえず、彼の移動手段に関しても疑問を抱いたままになってしまった。

それとほぼ同時に防犯用のシャッターが警備員によって開けられ、局内に光が射し込んだ。



警備員に一連のことを話し、目を覚ました固法美偉に怒られ、意図とおりのことが終わった後、白井は初春に足に包帯を巻いてもらいながら、名も知らない恩人について話をしていた。

「本当にあの人たすけてくれましたね。」

包帯を巻きながら初春は言う。今考えるとあのときはかなりの無茶振りをしていたと少し恥ずかしく思う。しかし彼は文句ひとつ言わず、完璧に助けてくれた。

「ええ、でも名前を教えて下さらなかったのでお礼をすることができないですの……。」

名前さえ分かれば風紀委員の権限で書庫バンクにアクセスし、調べることができののだが教えてくれなかったためそれはできない。しかもなぜか郵便局の監視カメラはレンズが挟えぐられているようになってい。なぜかという、美影がワームホールで局内に入る前に重力操作で監視カメラの位置を探知し、ブラックホールでレンズだけ吸い込んでしまったからだ。

そのため、顔認証システムを使い、書庫で検索をすることも出来なくなってしまった。

また、足が付かないよう彼は局内で何も触っていないため、指紋も残っていない。

白井が美影を探す方法を見つけようと思考している中、初春が口を開いた。

「私、約束します。」

「え？」

「『己の信念に従い、正しいと感じた行動をとるべし。』・・・私も、自分の信じた正義を曲げません。何があってもへこたれず、きつと、白井さんのような風紀委員になります。」

初春は微笑みながら言う。

そして白井も『約束』をする。

「その約束、わたくしにもさせてくださいな。・・・今までなんでも一人でできるつもりでいましたけど、それはとんだ思い違い。・・・ですから、これからは二人で、一緒に1人前になってくれますか？」

白井は包帯が巻かれた手を差し出す。

あの人が言ったように自分は自分を見つめなおすことができた。なら一歩、どれだけ小さくても一歩前に進もうとする。目の前にいる仲間とともに。

「・・・はい!!」

初春は白井と同じように手を差し出し、手を握り合った。

近くで怪我を治療されている固法もその光景を微笑んで見ていた。



（あーあ、また違うところ探さないとな。）

思いがけない事件があったため、今だ一方通行に押し付けられた願書をもっている美影はひとり、新たな郵便局をさがし、日が降りてきて寒くなってきた中、歩いていた。

原作との相違点など（前書き）

この小説の説明です

原作との相違点など

各キャラクター設定

アクセラレータ
一方通行 能力…一方通行

・御坂美影を唯一の親友としている

・コーヒー好き

・美影に何かしらの弱み（恥ずかしいこと）を握られている

・長点上機学園高等部1年の生徒

・暗部組織『グループ』に所属（物語の最初から）

かきねていしく
垣根帝督 能力…未元物質
ダークマター

・高身長で顔は整っていて運動神経抜群でかなりもてる

・紅茶好き

・プレーボーイ

・麦野沈理とは幼馴染で…

・長点上機学園高等部1年の生徒

・暗部組織『スクール』に所属

みさかみこと
御坂美琴 能力…超電磁砲
レールガン

・ツンデレ

・とある高校生に好意を抱いている

・絶対能力進化、妹達については知っているが、知ったときには実験は凍結されて詳しく知らないため 一方通行には敵意を抱いていない

・美影のことは『美影』と呼ぶ それにはとある理由が…

・美影には何度も勝負を求めるがレベル5になってからは一度も戦

っていない

- ・暗部とはまったく関係がない
- ・常盤台中学第2学年所属

麦野沈理 むぎのしずり 能力…原子崩し（メルトダウンー）

- ・レベル5では1番年上（高校2年生）
- ・足が太いのを気にしている
- ・序列にコンプレックスを抱いている
- ・垣根帝督とは幼馴染で・・・
- ・暗部組織『アイテム』に所属

食蜂操析 しょくほう ほうみさき 能力…心理掌握 メンタルアウト

- ・常盤台中学第3学年所属で女王と呼ばれている
- ・よく能力で相手の思考を読み取るが、気に入った人や好きになつた人には能力を一切使わないように している

・実は ●●●

御坂美影 みさか みかげ 能力…無限重力 ブラックホール

- ・この小説の主人公で御坂美琴の実の兄
- ・ハッキングや機械をいじるのが得意
- ・妹の美琴には自分のことは一切言わないように口止めしているため、彼を知っている者は少ない
- ・かなり冷静に物事に対応する
- ・親友の一方通行ですら、考えていることが読めないらしい
- ・自分のことをあまり周りに言わない
- ・長点上機学園高等部1年の生徒
- ・暗部組織『スペース』に所属

削板軍覇 そぎいたぐんは 能力…不明（最大原石）

- ・よく『根性』という言葉を使う
- ・よく鉢巻バンクを巻いている
- ・書庫には能力でおこる現象しか載っていない
- ・長点上機学園高等部1年の生徒
- ・頭はあまりよくない

その他

- ・妹達シスターズは一〇〇〇一シスターズ体作られた
- ・暗部組織『スペース』の構成員は美影一人
- ・絶対能力進化（レベル6シフト）は第〇〇〇〇一実験で凍結
- ・原作ほど過激ではない・・・と思われる

原作との相違点など（後書き）

まあ気に入らないなら読まないで下さい

入学式（前書き）

ほとんど科学サイドの話を書くつもりです

入学式

春というのはさまざまなことの節目となる。

学生が人口の8割を占める『学園都市』では新たな学校に入学したり、新たな学年になり、気持ちが大きく変わる者が多くいる。

また、寒い冬を越え、暖かくなっていき、学園都市によって品種改良された桜はちょうどこの時期に満開になっており、あたり一面を鮮やかなピンク色に染め、見ているものの心を奪う。

そして今年の春からはレベル5が4人もしかかも同じ高校の生徒となり、その学校を、また周囲の学校を大きく変えることとなるだろう。



「おーい、一方通行。」

今日高校に入学する少年、御坂美影は共に同じ高校、長点上機学園に入学する『親友』、学園都市最強の一方通行の家でインターフオンを押しながら彼を読んでいる。

長点上機学園は第十八学区にあるのだが二人とも引越すことはなく隣接する第七学区で暮らしている。

そのため彼らのこれからの朝は自然と早くなる。

「はいはい、朝っぱらからうるせエなァ。」

欠伸をしながら同じ制服を着た髪が白く、目が赤い少年、一方通行が部屋から出てきた。

早起きになれていないのか、かなり眠そうだ。

「んじゃ、行くか。」

「おう」

美影の声に様々な思いを抱きながら一方通行が返事をする。
今日から今までとまったく違った生活が始まることだろう

今日はさまざまな高校の入学式がある。志望校に受かったもの、受からなかったものがあるが、彼らはどちらにも当てはまらない。

美影も長点上機学園に決めたのはなんとなくであり、正直どこでもよかったのかもしれない。

一方通行も他のレベル5に興味があっただけで学校がどこでもよかっただろう。

入試試験に関しては彼らは受けていない。なぜなら、先日、美影が願書を出したらレベル5ということがあってか試験についての資料ではなくそのまま合格通知が届いたからだ。

おそらく、他のレベル5や去年高校生になったレベル5も同じだっただろう。

これからのことを話しながら、徒歩や電車で移動し、学区を越え、二人は自分たちが入学する高校に着いた。

長点上機学園

能力開発において学園都市トップを誇る超エリート高である。

また、高位能力者でなくても一芸に秀でていれば入学は可能なため在学条件に強能力者（レベル3）以上がある常盤台中学とは違い、無能力者（レベル0）も多く在籍している。



これからのことを話しながら、電車や徒歩で移動すること約40分、二人はようやく長点上機学園にたどり着いた。

一言で言うところの学園は広い。

見渡すと様々な施設、競技場があり、出来ないことはないのではないかと思わせる。

二人は周りを見渡しながら、受付を済まし、入学式が行われる建物に入っていく。途中一方通行の奇妙な容姿にとまどい、目を向けるものがいたが、いつものことなので二人はまったく気にしていない。

まだクラスは発表されていなくて式での席は自由なため、二人は出来るだけ後ろのほうに座る。

そして、入学式が始まった。



『ええ、新入生の皆さん、入学おめでとうございます。』

学園長の話に入った。お約束で話はかなり長い。

緊張していてがちがちに固まっているものも見られるが美影と一方通行はまったく緊張せず、ただ早く終わらないか、と思っていた。また、目立つことが嫌いな美影はここでレベル5の話にならないことを願っていた。

そんな中、退屈そうな一方通行が美影に小声で話しかけていた。

「ンで、俺ら以外のレベル5ってのはどいつなんだ？」

一方通行はそればかり気になっていたようだ。だがそれについて調べようとしていなかったのか誰が同じレベル5なのか知らないらしい。

それに対し、美影はかなり詳細に調べていたらしく周りを見渡すとすぐに二人見つけた。

「あの最前列にいる茶髪のロンゲが第二位だね。」

小さく指を刺して他に聞こえないように小声で言う。

その先には彼らと同様かなり気楽に式に臨んでいる男がいた。

「あのチンピラみてエのが万年第二位か。」

第一印象が『チンピラ』になったらしく、本人が聞いたら怒りそうな台詞を口に出す。

「んで、あの鉢巻巻いているやつが第七位。」

白髪の一方通行ほどではないが、鉢巻をしているためかなり目立ってしまっている男に指を向ける。

こちらはかなり緊張していると顔からはっきりと読み取れる。

「二人とも能力が複雑すぎてお前と同じくらい研究所を転々としていたらしい。しかも第七位のほうは能力についてほとんど分かっていないらしい。」

「・・・なんでお前はそんなにくわしインだよ。」

一方通行は疑問に思ったことを言う。

確かに美影は二人に詳しく、二人が長点上機に入学することも知っていた。そのため、かなり奇妙に思えるといっても過言ではない。

「・・・まあ、俺の情報網のおかげかな。」

「あア、そう・・・」

どんな情報網をしているのだ、と普通なら思うのだが、一方通行は彼のことを知っているためその台詞は不思議に思わない。

どうせハッキングでもしたのだろう、と正解であることを予想した。

『新入生代表。新入生代表、平井正太郎君お願いします。』

校長先生の話が終わり、新入生代表である髪がきれいに整えられ、眼鏡をかけた見るからにまじめそうな少年がステージへと上る。

「なんだア、あの三下はア？」

一方通行はステージで昨日何とか覚えたスピーチをしている少年を見て思ったことが口に出る。

こんなことは面倒臭くてやりたくないのだが序列1位の自分を差し置いて堂々とステージに立っている男が気に食わないようだ。

「これは入試試験で1位を取ったやつがやるらしい。」

「そんなもん俺がやれば確実に満点じゃねエか。」

レベル5は全員推薦合格なため、これは出来ないのだと一方通行は理解したが、やはり気に食わないらしい。

「今はいい気になっているけどすぐに現実を見ることになるだろうね。」

「あア、たっぷり見せてやろうじゃねエか。格の違いを。」

まさかレベル5が4人も入学したとは夢にも思っていないらしく、平井正太郎はまるで、目の前にいるやつ全員が格下であるといった表情をしていて、優越感に浸っている。

そんな彼を見て一方通行は不敵な笑みを浮かべる。

入学式が終わり、クラスわけが発表された。その方法は新生用の玄関に各クラスごとに張り出されているというものであった。

美影と一方通行は近いクラスのものから見て行き、二人とも同時に同じ紙に名前を見つけた。

美影の名前はともかく、一方通行の名前はそのまま『一方通行』と書かれていて疑問に思った生徒も何人かいる。

「どオやら『四人とも』同じみてェだな。」

「みたいだね。」

二人が自分たちのクラスの名簿を見ていくと『垣根帝督』、『削板軍覇』の名前もあった。

おそらくレベル5をまとめて『監視』出来るほうが都合がいいのだろう。

「チッ、あの三下の名前は無えみてエだな。」

なにか企たくらんでいたらしいがそれが出来なくなったらしく舌打ちをした。

美影はそんな一方通行をみて高校生活に対し少し不安になった。



教室でもなぜか自由に席を選べるらしく、美影と一方通行は入学式と同じように一番後ろの席に座った。また、垣根帝督も同じように最前列に座り、削板軍覇においてはまだ緊張しているようだ。

しばらくして担任の教師と思われる30歳ぐらいの男が入ってきた。このとき皆が初めて担任の顔を見たことになる。

その男は教卓の前に立ちチョークを手に持ち、黒板に自身の名前であろう文字を書く。

「あー、俺がこのクラスの担任になった山口良平だ。一年間よろしく。」

クラスの何人かがよろしくお願ひします、とそろえていった。

美影と一方通行は面倒くさいのか言っていない。

生徒の返事を聞いて再度担任は口を開く。

第一印象は大切、といわれているだけあって生徒は彼が何を言うのか気になっている。

だが、その内容は自分に好感をもってもらうような台詞でも生徒の合格をとりあえず褒めるようなお決まりの台詞でもなかった。

「突然だが、皆にいつておかないといけないことがある。

このクラスにはあのレベル5がなんと4人もいる！！」

『えええ~~~~~！！！！！！！！！！』

（マジか……）

美影は他の生徒とは違う理由で、表情は変えず、あきれるように心の中で驚いていた。

入学式（後書き）

オリキャラの名前は適当です

大暴露大会

（あーあ、面倒くさいことになったなあ・・・）

担任の教師によるいきなりの爆弾発言により、教室中が大騒ぎになっている。

あたりを見渡す者、だれだれだ、と大声で言う者、あいつじやねえの、と友達と予想しあう者。

とにかく混沌な空気となっている。

騒いでいないとすればそれはレベル5である者ぐらいである。

と美影が思っていたら、

「なにー！！ 俺以外にも3人もいたのか！！？」

と大声で鉢巻を巻いた漢、オトコ削板軍覇は大声で言う。どうやらこのことは美影のように知っていたわけではないようだ。

その台詞を聞き、まず1人、レベル5が誰であるのか皆にばれてしまった。偶然隣に座っていた少女は今まであこがれていたレベル5がすぐ横にいることに驚き、尊敬と羨望の眼差しを向けている。

当たり前だが、近くにいらなくても騒いでいるものがたくさん見られる。

（・・・俺もばれたらああなるのか？）

目立つことが大嫌いな少年、御坂美影は思う。また彼はちやほやされることも嫌いなため、今の削板の状況になると苦痛以外の何物でもない。

いつかは必ずばれるだろうが、今であっては欲しくない、と願っていた。

「じゃあ窓側の最前列のやつから一人ずつ自己紹介してくれ。」

この状況を作り出した張本人、担任の山口は今度こそお決まりの台詞を言う。レベル5を先に紹介したいのだろうが実は彼も4人もいると学園長に聞かされただけで顔までは知らないのだ。

その言葉通り1人ずつ自己紹介を言っていく。趣味や特技を言ったり、好きな異性のタイプを言ったりする者などが見られる。

そんな中、他とは違うことを言っている者がいた。

「俺の名前は垣根帝督、レベルは5だ。一年間よろしく！」

そういった途端、またしても教室内は騒ぎ立った。

超エリート高である長点上機において、レベルを紹介して驚かれる者なんてそういない、というより4人しかいないだろう。

しかも彼は顔がとても整っているため削板軍覇のときとは違う視線が女子から向けられる。

「趣味は何ですか？」

「好きな異性のタイプは何ですか？」

「好きな食べ物は何ですか？」

と、女子からマシンガンのような質問攻めに合ってしまった。

垣根の表情を見ると満更でもなく、ひとつひとつ丁寧に答えている。その状況を彼は心地よく感じているのだろう。

そんな垣根に対する美影の第一印象は『女たらし』となった。

すると男子からは嫉妬され、にらみ殺されるのではないか、という視線を向けられるが、それによりますます優越感に浸る垣根。

その質問攻めのなかに、垣根が無視できないものがあつた。

「垣根君の序列は何位ですか？」

とある少女が投げかけた疑問。

序列というものは7人のレベル5を順位付けしたものである。そして序列は戦闘力や演算力ではなく『能力研究の応用が生み出す利益』が基準で決定される。つまり、勘違いしているものが学園都市中にいるが決して『強ければ順位が上』というわけではない。

「俺の序列は残念ながらその白いやつで第二位なんだよ。」

ぱっと見白い少年、つまり一方通行を指差しながら言う。

これで一方通行がレベル5、しかも序列一位であることがばれてしまった。残るのは美影ただ一人。

「なァーに勝手にばらしてくれてんだよ、万年第二位。」

「なんだ、かっこよく自分で言いたかったのか？」

「てめェに言われるのがムカつくだけだ。」

笑いながら問う帝督に一方通行は不服そうに答える。

自分で自慢するのは気が引けるのだがさらりと言われたことは気に入らなかったらしい。

一方通行はチツ、と舌打ちをし、それ以上はなにも言わなかった。

自己紹介のリレーが再開するが垣根のに比べればどれも見劣りする。

彼と同じぐらい驚かせるとしたら同じレベル5ぐらいだろう。

もちろんレベルを紹介するような奴は他にはいない。

そして一方通行の番が来た。

「そのチンピラが言ったとおり学園都市一位の一方通行だ。」

堂々と自己紹介を言うが皆が気がかりなことがひとつ。クラスわけの名簿でも気になっていた名前についてだ。

「アクセラレータというのは本名ですか？」

一方通行や美影の予想通りの疑問が来た。誰でもその名前には不自然に思うだろう。

「いや、それは能力の名前でまア、ニックネームみてェなもんだ。あと本名は忘れた。」

その一言にクラス中が驚く。

いろいろと創造しているものがいるが、レベル5というのはそういうものなのか、と変に納得している者もいた。

そしてまた自己紹介レースが再開し、ついに美影の番がやってきた。

「御坂美影です。一年間よろしく願いします。」

彼が言ったことは最小限で、またそれ以上いう気もなかった。
目立つのは嫌いなため変に下手にしゃべって気づかれ、騒がれないように座って次に回そうとしたとき、

「御坂クンのレベルは何ですか？」

と一番聞かれたくない質問がピンポイントで飛んできた。
質問の発信源は美影の隣、彼がよく知っている人物、一方通行であつた。

言うだけ言って、一行通行はあたさまに顔を背ける。

(……この白モヤシめえ。)

「……一方通行、いやがらせか？」

「もういいだろ、ばらしちまえよ。」

軽くにらみながら言う美影に対し、笑いながら他人事のように言う一方通行。

二人が小声で会話している中、周囲ではまた騒ぎになっていた。

「そういえばあいつ、一方通行とずっといたぞ。」

「そういえばそうだな、隣に座っているし。」

「じゃあ彼もレベル5なのね！」

どうやら目立った容姿の一方通行といたせいで美影もわずかなが

ら目立っていたらしい。

美影は諦め、はあく、とため息をし

「俺もレベル5です。」

諦めた。

予想通り周りの空気が変わり、御影に対する視線が変わる。

幸い、『御坂』に反応する生徒はいなかったようだ。

あまり自分のことを好まない御影は垣根のように質問を受ける前に席に座り、前に座っている人に強引に自己紹介のバトンを渡す。

美影本人は自分の容姿をあまり気にしないが彼もかなり美形であるため美影を頬を赤らめて見つめている女子もいた。

そして4人目のレベル5の番になる。

「俺は削板軍覇！！　もうばれているみたいだが俺もレベル5で最^ナ大原石と呼ばれている！！　根性入れていくから一年間ヨロシク！！！」

と大声で、根性を入れて自己紹介した途端なぜか彼の机が、ドオオーン、と自然では見られないカラフルな炎を上げて弾け飛ぶ。幸い誰にも被害はなかったようだ。

その不可思議な光景に周囲は目を丸くしている。

が、彼は自己紹介を言い切ると普通に座り、あれ、机がねえ！？、と素っ頓狂なことを言っている。

どうやらわざとではないらしく、緊張のあまり動揺し起きてしまった現象のようである。

(・・・あれが最大原石^{ナンバーセブン}の能力か。・・・重力探知で視てもまった

く原理がわかんねえな。」

そんな中、美影は冷静に軍覇を観察していたが入学前の下調べ（ハッキング）で見たように『不可解な能力としか分からなかった』ようだ。

担任の山口も驚いていたようだが、コホン、と一回咳払いし、最後に自己紹介をした。

内容は担当教科、専攻している能力などであった。

「ええー、今日はこのホームルームで終わりだ。皆、帰宅の準備をするように。」

この日は入学式の日でもあったせいか、学校は午前で終わり、午後は希望者は部活見学をすることが出来る。

削板以外は特に片付けるものもなく、すぐに挨拶をする。

「さーて、帰るか、一方通行。」

「腹も減ったし、飯に行くか。」

垣根は挨拶の後、すぐに大勢に囲まれていて、質問に答えたり、楽しく会話したりしている。

そうならないように、美影は一方通行を連れて、すぐさま教室を出て、玄関で靴に履き替え、学校から出ようとする。

「昼、何食う？」

「そォだな、今日は中華でもいくか。」

「おっ、いいね、そうするか。」

昼食のメニューが決まったらしく、美影は携帯を使い良さそうな中華料理屋を探す。

彼らが学校から出るため、玄関から出て、校門へ向かおうとしたとき、

「ちょっとまって!! そこの白いやつ!!!!」

不意に、後ろから知らない奴から大きな声で呼ばれた。

大暴露大会（後書き）

なかなか進みませんね。

大乱闘？

汚れひとつない高級ソファやテーブル、学生の汗と涙の結晶である光り輝く優勝旗がずらりと置かれた部屋、長点上機学園の一階にある学園長室には5、6人の男女が一人の男性と対面している。

「学園長は何をお考えなのですか？」

その中の一人、超能力者（レベル5）4人の担任となった教師、

山口は目の前にいる60歳ぐらいの男性に問う。

彼の目は真剣そのものだ。

「全クラスホームルームで必ずレベル5の存在を知らせるなんて彼らに失礼ではありませんか？」

実は山口が第一声でレベル5の存在を告げたのは学園長の命令であつたからだ。
ばらした

4人のクラスだけではなく学園内にいるもの全員が知らされているため今はその話題で持ちきりとなっている。

いずれ知れわたるとは重々承知だが、前触れもなければ必ず大騒ぎになってしまう。

「なにかトラブルになるのは目に見えています。」

山口が一方通行で話している。

学園長は何も言わず、彼の顔さえ見ず、ずっと窓からグラウンドの方を見ている。

が、山口が言うだけ言うと学園長はその重々しい口を開ける。

「それが私のねらいなのだよ。」

学園長室内では一人を除き、全員が首を傾げた。



「何だア？ てめェら。」

一方通行と美影は声がした方向に顔を向ける。

そこには静止の声をあげたものだけではなく闘争心むき出しの者が約10人いた。

「先輩に向かってなんだその言葉は!!」

その中のリーダー格のような男が一方通行の言葉遣いを注意する。さらに彼らの表情が強張る。

美影は彼らのネクタイの色を見ると自分のとは違っているのに気づき、またその色から彼らが3年生であることを悟る。

「はいはい、ンで、その先輩方が俺に何のようですかア？」

一方通行はいやみのように言う。

一向に態度を改めない一方通行を睨けるのは諦め、本題に入る。

「お前がレベル5の第一位だな？」

「・・・だったら何だってンだ？」

「調子に乗りやがって、・・・俺たちにお前に高校ってのを教えてやるよ。」

先輩Aは上から目線で言う。

一方通行は学園都市最強（自分）を倒し、高揚感に浸ろうとする馬鹿と捕らえた。

日々そう考える武装無能力集団スキルアウトに絡まれている彼は、こういうのは無視が一番、と知っているので何もいわず前方を向く。

「行くぞ、美影。」

「はいはい。」

美影も同じ気持ちで先輩を無視して共に歩き出す。

美影はレベル5とは分かっているらしく、彼には歯牙にもかけていない。

「おい逃げんのか!!」

「どうせ超能力者レベル5ってのはたいしたことないんだろ!!」

「一年のくせになまいきだぞ!!」

後ろからくる罵声には目もくれず、二人は空腹を満たすべく前進する。

だが1つの暴言に一方通行が反応した。

「怖いのか!?! 白モヤシ!?!」

一方通行は立ち止まる。となりの美影はその声をきき、あーあ、
と言いながらその発信主に同情する。『モヤシ』というのは彼にと
ってNGワードで以前その言葉を彼に言った武装無能力集団の一人
が死にかけるとこまで苛められたのを彼は知っている。

「・・・美影、・・・いいか？」

「・・・殺すなよ?・・・頼むから。」

こうなっては止められない、と美影は悟り、最悪のパターンにす
ることだけはしないよう忠告する。

だが、保証はない。

一方通行は返事をせず、無謀な輩の方に体を向ける。

「おい、先輩ども。」

一方通行の声についさっきまで叫んでいた先輩たちが笑みを浮か
べる。

彼らは超能力者^{レベル5}と大能力者はレベル^{レベル4}が1つしか変わらないからや
り方次第では勝てるだろうという考えであった。

が、その『1』の差には計り知れないほどの大きな壁があると彼
らは知ることになる。

「お前らにに格の違いをみせてやるよ。」



（あーあ、あの先輩たち可哀想に・・・。）

一方通行がグラウンドのど真ん中で戦闘いくさめをしている中、空腹な美影はその戦闘を見ている野次馬の端で見ていた。
すると、不意に後方から声がかかる。

「おーおー、すごいことになってんなあ。」

振り向くとそこには茶髪の髪でホスト風のイケメン、レベル5第二位の少年、垣根提督がいた。

「お前もあれくらい出来るだろ。」

「まあな。」

謙遜することなく答える垣根。
すると彼の興味は離れたところで戦っている一方通行から目の前の御坂美影へと向けられた。

「お前の名前、『御坂』ってことは第三位の兄かなにかか？」

どうやらホームルームで何も言わなかったが垣根は気づいていたらしい。

『御坂』という苗字に。

「実の兄だよ。」

美影の返答を聞くと、垣根は少し驚いたような顔をした。

「まさかレベル5で一番調べやすかったやつが一番近いところに6位がいたとはなあ。」

どうやら垣根には御坂美影の情報はまったくなかったようだ。

『一番調べやすかった』というのは、彼の妹である超能力者（レベル5）第三位の御坂美琴はレベル5の中では広告塔のような役割をしていて彼女の能力であり、異名『超電磁砲^{レベルガン}』は学園都市の多くの生徒に知られている。

が、その兄、御坂美影は得意のハッキングを使い、『表』と『裏』の情報を巧みに操作したため垣根には情報が入らなかったのだ。

「書庫^{バンク}には妹のところに家族構成でちゃんと“兄”って書いてあったろ？」

「ほとんどなにも書いてなかったから『外』にいたと思ったんだよ。そうだ、せっかくだしメールアドレス交換しねえか？」

「いいよ、別に。」

特に断る理由もなく、レベル5同士だからなにかと都合がいいだろうと思い、美影は制服のズボンの左ポケットから黒色の携帯電話を取り出し、メールアドレスを交換する。

突然、美影は先ほどから気にかかっていたことを言う。

「なんかこっちも視線が多い気がするが。」

美影は垣根に話しかけられてから一方通行だけではなく自分たちにも視線が集まっていることに気づいていた。だが彼は正直鬱陶しく思っていた。

「そりゃ俺たちがレベル5でかっこいいからだろ。」

「よくそんな台詞が言えるな。」

「お前ももう少し自覚したらどうだ。」

「なんだそれ。」

垣根のナルシスト発言に若干顔が引き攣る。

自分の容姿をあまり気にしない美影ではあるが、彼は垣根に負けないくらいの容姿をしている。

そんな二人を見ていた二人と同じクラスの生徒は全員同じことを思っていた。

（（（（超能力者（レベル5）のレベルが高い！！）））））

二人が話していると一方通行と同じように声がかけられた。

「おい！ その奴！！ お前がレベル5の第二位だろ！」

また違う先輩たちに今度は垣根が呼ばれた。

そして同じように宣戦布告され、

「いいね、すこし遊んでやるよ。先輩たち」

と垣根が乗り気になり、グラウンドへと歩いていき、新たな戦闘^{いじめ}が始まった。

（・・・・・・変だな・・・）

残された美影は現在の状況を不思議に思う。

その不思議に思う対象は自分が宣戦布告されない、ということではない。むしろそのことは彼にとってありがたいと思っている。

彼が不思議に思っていることは、教師が誰も止めようと思わないということ。

あれだけ目立つところで、しかもレベル5というだけあって派手にやっていて、ギャラリーがたくさんいるのにそれを止めようとする教師がいない。

普通なら止めるはずだ、と思い美影はあたりを見渡す。

すると、彼の視線は一箇所に向けられた。

一階からグラウンドを観察している老人、入学式で長い話をしていたこの学園の学園長だ。

止めようとする身振りを見せず、この状況を楽しんでいるようにも見える。

(・・・そういうことか。)

美影のの顔はすこしにやついていた顔になった。

学園長をまじまじと見ていると、視線に気がついたのか目が合った。



「彼は誰かね？」

学園長が突然後ろの教師たちに質問する。

その声に反応して教師たちが学園長の視線をたどる。

それに答えられたのはその人物の担任、山口だけだった。

「彼は超能力者の序列第六位、御坂美影です。」

「ほお、彼が唯一居場所が分からなかった第六位か。顔を見たのは初めてだよ。」

レベル5というにも関わらず本人の情報操作により学園長にも今まで情報が入ってはこなかった。

彼が入学申し込み書を送ったことでやっと彼の存在を知りえたようだ。

（・・・この第六位、なかなか侮れんな。おそらく気づいただろう。）

こちらを不敵な笑みで見てる第六位を見て思う。

彼だけは自分の考えを読み取った、と。

学園長も同じような笑みを浮かべていた。

「学園長、どうかなさいましたか？」

山口の隣にいた女性教師が学園長の表情の変化を訝り、たずねる。学園長はついにグラウンドから目を離し、教師たちを見る。

「君はこの学園についてどう思う？」

突然学園長から諮問され戸惑うが、正直に普段から思っていたことを言う。

「他にはないほど、優秀な学園だと思います。」

「そう、去年大覇星祭で優勝したのがその証とも言えよう。わが学園ながら私も誇りに思うよ。」

学園長は共感する。そこに、だか、と付け加え、

「極めて優秀だからこそ彼らは自身が1番と考え、競争意識が低下する。人はそうなれば退化していくのだよ。だからこそ一度彼らにレベル5と戦わせるように仕向け、自分たちが頂点でなく、上がいることを身をもって知らせる必要があるのだ。」

学園長は自信の企みを説明する。

教師たちは学園長の考えは理解する。が、やはり心配な点がある。

「ですが、レベル5に打ち負かされ大怪我を負わされてはまずいのでは？」

「それは少々心配であったがどうやら大丈夫そうだ。」

学園長は教師たちの不安を払拭させる。

「なぜ分かるのですか？」

「あの野次馬たちを見てみなさい。あの第六位もおそらく分かっているだろう。」

学園長の言葉に煽られ野次馬の生徒たちを見る。
だが何も分からない。

「特に何もないと思いますが。」

「そう、なにもないからこそだよ。」

そこで教師たちも初めて気づく。

「あれだけ大きな力を使っているにも関わらず他の生徒には流れ弾が飛んできていない。それはつまり彼らは場を^{わきま}弁え、能力を^{チカラ}調節しているということだ。しかも戦っている上級生も目立った怪我をしていない。」

学園長の言うとおりの一方通行や垣根帝督と戦っている先輩たちは擦り傷や浅い切り傷はあっても致命傷と呼べるようなものは1つも無い。

教師たちは多少安心した。



（どうやら心配はなさそうだな。）

美影は二人、とくに一方通行を見ながら思う。

万が一、一方通行が衝動的に暴れたら彼は止めに行くつもりだったからだ。

精神的に折れてしまったらさすがに手の施しようがないのだが。

戦闘開始から約10分、二人とも終わったようでグラウンドから出てきた。

先輩たちは倒れてはいるが大事無いようだ。

先輩からも歓声が上がっているとところをみると宣戦布告した先輩

たちは評判が悪いようだ。

「あーア、余計に腹へっちゃまったなア。」

「どうだった、先輩たちは？」

不機嫌ながらやり遂げたような顔をしている一方通行に聞く。

「武装無能力者集団よりはマシだが俺には物足りねエなア。おまえくらいじゃねエと『勝負』にもなんねエ。」

彼の能力のベクトル操作で全て反射してしまえば何か工夫しない限り彼に傷をひとつつけることどころか戦いと呼ぶことさえ出来ないだろう。

「んじゃ俺と戦るか？第一位。」

第二位、垣根帝督が茶化すように言う。彼は一度は一方通行と戦ってみたいのだろう。

だが、空腹のせいか興味を持たず、

「めんどくせエからパスだ、万年第二位。」

「いつかお前を越えて一位になってやるよ。」

「一生言ってる、チンピラが。」

美影は二人がここで『戦争』を始めるのではないか、と少しひやひやしたが大丈夫そうだ。

もし二人が本気で戦い合ったら学園なんて消し飛ぶだろう。

「じゃあ、今度こそ飯行くか、いい店^{とこ}みつけたし。」

美影は二人が遊んでいるとき携帯で良さそうな中華料理屋を見つけたようだ。

「俺も言っ^ていいいか？」

「いいよ。中華で良ければ。」

垣根が同行を求めたが美影はすぐに受容した。

一方通行が文句を言っていたが3人で第四学区の高級中華料理屋に向かった。



（口の中油でベタベタするな・・・気持ちわりイ・・・。）

中華料理屋では一方通行と垣根が何の対抗意識か、悪乗りし、必要以上に注文したため美影も巻き込まれて大量に食べるはめになってしまった。

しかも油が多く使われていたため彼の口の中のいたるところに油がこびりついている。

まともに動けなくなるほど暴食した二人と別れた美影は、口の不快感を取り除くため自動販売機を探していた。

余談だが、代金は6桁に達したが、現金で一括払いし、定員が驚いていた。

これも超能力者（レベル5）の財力^{チカラ}といえよう。

重力探知で最寄りのものを見つけ、今はそこに向かい歩いている。
自動販売機が目に見えるとその前にひとりのとある少女が立っ
ているのが見えた。

気にせずその自動販売機に近づいている途中、その少女は、

目の前の自動販売機を、豪快に蹴った。

秘密

（あー気持ち悪い。）

御坂美影は口の中のどろどろの液体（油）を除去すべく、自動販売機へ向かっている。

目的地が見えると、そこには一人の少女がいるのが見える。美影はそれに構わず自販機に近づく。

その少女のことは気にしていなかったのだが、一歩進めば中学生ぐらいだと分かり、また一歩進めば名門、常盤台中学の制服を着ていると分かり、また一歩進めばその少女の顔が分かり、約30メートルぐらいの距離でその少女は自分がよく知っている人物だと気づく。

見ているとその少女はお金を入れていないのか自販機のボタンが光っていない。

その怪しいとも取れる状況を美影はしばらく観察してみることにした。



「さーて、今日もジュースをもらおうわよ。」

とある少女が自動販売機の前に立ち、それに向かい、独り言う。
どうやら彼女はこの自動販売機の常連のようだ。
だが彼女はいままでで一度しかお金をその自販機に入れていない。
それにも関わらず、彼女に罪悪感など微塵もない。

その少女は自販機を眺めている。
その中には自身がお気に入りのものであればそうでないものもある。

自分が求める飲み物が見つかったようなのだが、これに決めた、
とは言わず、

「今日はこれを飲んでみたいわね。」

と、普通とは少しずれた言葉を発する。まるで、これからくじでも引くように。

その少女は、トン、トン、トン、となぜか自販機の前で軽快にステップを踏む。

集中し、自分のタイミングを見計らい、今だ、と意気込み、

渾身の蹴りを自販機のわき腹にぶつけた。

ゴォーーン、とすさまじい音が鳴り、その衝撃で一瞬自販機は体をそらせ、上半身が左右に揺れる。

その音と共に自販機の下半身では、ガシャン、とその体にふさわしい音をたて、ジュースが下に落ちる。

その少女はスカートを履いているがその下にはなぜか短パンを履いているようなので男を興奮させるようなものは見えない。

尤も、現在進行形で彼女を見ている者はそれが見えても何の感慨も覚えないだろうが。

少女はまるで普通にお金をいれ、ボタンを押して買うような、正規の方法で手にするかのようにプラスチックの透明の板をあげて、ジュースを取り出す。

「あちゃー、これが出たか……。」

どうやら希望のものとは違うものが出てきたらしく、眉を顰める。その缶には、『黒豆サイダー』と書かれている。

出てきてしまったからには仕方がない、と言わんばかりにしぶしぶ缶を開け、中の液体を飲む。

ジュースを飲むために顔を上に傾けたため、視界が少し広がり、いままで見えなかった人影がを目の端で捕らえた。

一連の動作を見られたことに驚倒し、ブウー、と盛大に吹き出した。

「ケホッ、ケホッ、…アンタ、もしかして今の——!!」

見た!?!、という前に、目の前の人物が誰なのか気づき、落ち着く。

「なんだ、美影じゃないの。」



(・・・・・・・・・・・・・・・・)

御坂美影は目の前の想像を絶する光景に衝撃を受けていた。

無理もない。昼間から目の前で、女子中学生が堂々と犯罪行為をしているのだから。

彼女の蹴りは、ゲームセンターであと少しで落ちそうなもの思わず叩いてしまう時のような生半可な衝撃ではなく、明らかに本気であった。

その少女はジュースを飲むとこちらに気づいたようだ。

「ケホッ、ケホッ、・・アンタ、もしかして今の――！！・・・
なんだ、美影じゃない。」

「なんだ、はないだろ、美琴。」

「いつから見ていたのよ。」

「『さーて、今日もジュースをもらうわよ。』、から。」

「それって初めからじゃない！」

二人は血のつながった正真正銘の兄妹。

姓は『御坂』、兄の名前は『美影』、妹の名前は『美琴』。

二人ともこの学園都市が誇る、7人しかいない超能力者（レベル5）だ。

「つーか、何物騒なことやってんだよ、お前は。」

兄、美影は一応妹の破天荒な行動を注意する。

妹、美琴はそれに構わずジュース（盗品）を飲む。

「仕方ないでしょ、去年これに万札飲まれちゃったんだから。」

どこが『仕方ない』なのか、激しく突っ込みたくなったが、何を言っても無駄だろう、と思い、ジュースを買うべく攻撃を受けた自販機の前に立つ。

「それ、お金を吸うだけで買えないわよ。」

美琴の言うとおり、試しに千円札を入れてみるが入っただけで何の反応もない。

「あらら……。」

「言ったとおりでしょ。あとこの自販機、どこか故障しているらしいから、さっきの方法で取れるわよ。」

お前が壊したんじゃないのか？とか、どうやってその方法にたどり着いたんだ？とか聞きたいことが次々に浮かんできたのが、やはり何を言っても仕方ないと思い、前の自動販売機を見る。

直ぐに口の中を洗いたいのでジュースを取り出すべく、ボタンを押さず、豪快に蹴ることもせず、自販機に手をあてる。

重力探知で内部のジュースの正確な位置をつかみ、重力操作でジュースを動かすことでジュースを下に落とすことに成功した。

犯罪にも見えるが、実際に入れた金額は手に入れたものより遥かに多いので、むしろ供給者にとってはありがたいことだろう、と美影は思う。

缶を見ると、『ヤシの実サイダー』と書かれている。
今の美影にとって炭酸飲料の方が望ましかったため、顔には表れないが喜んでそれを飲む。

「で、どうなのよ？」

「ジュースのことか？」

「違うわよ。学校のこと。」

突然の美琴の質問に適当に答える美影。本当は聞きたいことは分かっていたようだ。

美琴は美影が今まで学校に行っていなかったことを知っている。
もちろんなぜそうしているのか何回か質問したことがあったが、はつきりとした答えは一度も返ってこなかった。

一応、妹として兄のことを心配していたようだ。

「まだ1日目だからわかんねえけど、まあ、面白そうだな。」

「そう。」

「そっちはどうなんだ、先輩になってみて。」

今度は逆に今日から常盤台中学第二学年の生徒となった美琴に質問する美影。

やはり彼も兄として妹のことを心配している。

「特に変わったことはないけど、なんか妙に気に入られた後輩がいるのよねえ。」

「へえ、それはよかったな。」

「少し度が過ぎている感じがするけどね。」

話していると美影の携帯が鳴った。

それを取り出し、画面を見る。そこには『非通知』と表示されていた。

「はい。」

『私だ、悪いがすぐにこちらに来てくれ。』

電話に出ると無機質な声が聞こえてきた。その声は美影が知っている声だった。

「はいはい、わかりました。」

特に不審に思うことなく返事をする美影。
彼を見て美琴はなにか予定ができたのだろうと推測する。

「なんか知り合いに呼ばれたから行くわ。」

そう言って歩き出す美影。

だが美琴は彼に言っておかないといけない事があるようだ。

「言っておくけど、さっきのこと！、誰にも言わないでね。」

先ほどの犯罪行為を黙秘するように言う美琴
それに対し、美影は少し微笑み、言う。

「俺も言わなかったら秘密にしておいてやるよ。」

飲み干したヤシの実サイダーの缶を見せながら言う。そういった後、美影はその缶をゴミ箱に見事な放物線を描き、投げ入れた。

その言葉に美琴は安心する。

彼女は兄が約束は絶対を守ると知っているからだ。

美影が見えなくなり、これからどうしようかな、と考えていると、

「おねー！ー！ー！さまー！ー！ー！！！」

と大声で叫びながら同じ常盤台中学の制服を着た少女が美琴に抱きついて来た。

美琴はいき나りのことに驚き、その少女を何とか引き剥がそうとする。

「いきなり抱きついてくるんじゃないわよ！！ ていうかその『お姉様』って言うのは何なのよ、黒子。」

黒子、と呼ばれた少女は白井黒子といい、茶髪をツインテールジャツジメントにしている、その腕には盾をモチーフにした、風紀委員の腕章がついている。

「お姉さまはお姉さまですの。風紀委員としてのパトロール中に偶然お姉さまを見つけたということもこれも運命なのですね！！しかし、このようなところでお姉さまは何をいったい何を？まさかどこかの殿方と密会を！？ いけませんお姉さま！！ お姉さまは黒子と結ばれる運命ですの！！！！」

運命、という言葉を強調し、一方的に興奮しながら言う白井。彼

女は他でもない、先ほど美琴が言った、『妙に気に入られた後輩』である。

どこをどう間違えてこうなってしまったのかは分からない美琴だが、とにかく白井は美琴に心酔しているようだ。

「何分かわかんないことやってんのよ、アンタは。ていうかい加減に離れなさい!!」

最終手段の電撃を使い、何とか白井を引き剥がす。
しびれているが、めくるめく喜びを感じているようにも見える。

「ただのスキンシップですのに。　って、待ってくださいお姉さま
~~~~~!」

白井は言葉を見捨て歩き出した美琴の背中を駆け足で追いかけた。

このときの白井はまだ知らない。

美琴がついさっきまで共にいた者が自分の恩人であることを。

あと数秒早く美琴を見つけていれば自分を励まし、勇気付けてくれた人に会えたことを。



妹と別れた後、御坂美影は人気のない、路地裏にいた。

その場所に用があるわけではないのだが彼はそのような場所を求めて先ほどから歩いている。

重力探知で自分の半径100メートルに人が一人もいないことを確認し、目の前にワームホールを作り出す。

彼がそこを通るとき、彼の顔は美琴に向けていたものとは違い、厳粛な表情をしていた。

彼がワームホールの出口を作ったのは入り口と同じ第七学区にある、

演算型衝撃拡散性複合素材という世界一硬いともいわれる素材で作られた建造物、『窓のないビル』と呼ばれるところである。

そのなかにいるのは、男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』、学園都市の最大権力者、学園都市総括理事長、『アレイスター・クロウリー』。

美影にとって、対面するのに最も油断できない相手である。

彼に会う、すなわち窓のないビルに入るためには『案内人』と呼ばれる空間移動能力者による送迎が必要だが、ワームホールを使える御坂美影にとって、それは不要である。

「で、何の用なんですか？」

美影は先ほど自分と呼んだ当人に用件を尋ねる。

「『スペース』に依頼だ。この研究所をつぶしてもらいたい。」

電話のときと同じ無機質な声でその人物は言う。

その言葉と同時に何もないような空間にモニターがいくつか現れ、そこには地図などの研究所の詳細が書かれている。

美影はそれらを一度見ただけで全て暗記する。



一通り見終わったら再度質問する。

「で、なんでわざわざここに呼んだんですか？」

美影の言うとおり、いつもは仕事の依頼、情報は全て携帯に送られてくる。

そのため、電話がかかってきたときから不審に思っていた。

「少し君と話がしたくてな。」

「それは珍しいですね。」

らしくないことをいうアレイスターにさらに首を傾げる。

だが、心当たりがないわけではない。

「新しい学校はどうだ？」

「まだ一日なんでわかんないですよ。っていうか全部見ていたくせに。」

「見るだけでは君の気持ちは分らんよ。」

美影の言うとおりアレイスターは学園都市中に5000万機ほど散布されている70ナノメートルのシリコン塊、アンダーライン滞空回線によって、学園都市中を常に監視している。

もちろん、一般の学園都市住人はその存在を知らず、仮に存在の情報を掴んでもその小ささから電子顕微鏡を用いねば確認すらできない代物ではあるが、重力探知によって周辺を原子レベルで観察できる美影はその昔にその存在を知っている。

本来なら滞空回線の存在を一般人が知ってしまったら学園都市上

層部によって始末されるが彼はレベル5であるため、それとは対象外である。

「まだ言えることは少ないですけど、これから楽しくなりそうですね。」

「いずれ君の予期していたようになるだろうな。」

「・・・それは覚悟していますが。」

美影は隠微な表情をしているが、アレイスターは彼の心情をつかみ取れているような表情だ。

これ以上このこと話すのは無意味だと感じた美影は口を開く。

「もういいですか？」

「ああ、時間をとらせてすまなかったね。先ほどの研究所は今晚消してくれたまえ。」

美影はワームホールを展開し、その中に入る。

やはりアレイスターと直接話すのは避けたかったと思う。

彼が引き受けた仕事はアレイスターにとって不要になった研究所の解体。

そしてその研究者の『処分』、つまりこの世から『消し去る』こと。

彼が最初に引き受けたのもたしか研究所の解体であつたはずだ。

美影は明らかに人道に反することを咎めることなく引き受けた。それを知られれば確実に人々から非難され、まともな生活なんて

出来なくなるだろう。

まして、学校なんて、以ての外。

彼が精神崩壊を起こさず、『人間』としていられるのが不思議なくらいだ。

そうした穢れた仕事を引き受けるのが『暗部』

闇で活動し、人々のために動く組織

決して世間に知られてはいけないこの街の秘密

もちろん妹である美琴にも決して知られてはならない……

## 秘密（後書き）

ここで突然ですがアンケートをとりたいと思います

その内容は『御坂美影のイメージC V』です

小説には直接関係しませんがそれ次第で書きやすくも読みやすくなると思いますので提案宜しく願います

あと出来ればその方の代表キャラも書いてください。

私が気に入るものがあればそれを『設定』に書かせていただきますのでお楽しみを

## 背徳

(さてと・・・)

アレイスターからの依頼を受けた日の晩、御坂美影は依頼を実行すべく、自分の家から出かけた。

制服だと何かあったとき足がついてしまうため、もちろん私服に着替えてからだ。

研究所の場所は昼間に窓のないビルで見たものを完全に覚えていたため迷わず進む。

場所は第7学区の端。

第7学区は多くの学生が居住、通学しているが、広大な面積のため死角と呼べるところも数多く存在している。

今回の目的地である研究所は違法行為をしているため、目立たず研究を行うためそのような場所に建てられる必要があったようだ。

研究所にたどり着くためには人気のない路地裏を通らないといけないためビルとビルの間にある誰も使わないような細い道に美影は入ろうとする。

が、入ろうと右折した途端多くの目が向けられた。

むさ苦しい数人の男の目と黒い髪を伸ばした中学生の女の子の目だ。

(・・・ナンパか?)

と一瞬思ったがその状況を見るとあからさまに女の子が嫌がっているように見えた。

どうしようか、と悩んでいると男の一人が口を開けた。

「なんだ、テメエ？」

「何だって言われてもなあ……。とりあえず邪魔だからどいてくれない？」

「ああ！？なにふざけた事いつてんだよ。」

正直に答えたら、邪魔、という言葉が気に食わなかったのかにらみながら美影に近づいてきた。

髪を金髪に染め、鼻にピアスをしていて、背丈は美影と同じくらいだがかなり鍛えられていて腕は太い。

美影は、はあ、とため息をつき、

「とにかく邪魔なんだけど……。」

「なめたことってんじゃないっ！っ！っ！」

どこまでも冷静な美影に対し、頭に血が上った男は美影に殴りかかる。

しかしそのパンチを美影は少しかがむだけで交わし、男の懐に入り、腹に拳を打ち込む。

「ガハッ、！！！」

鳩尾に入ったのか、白目を向いて崩れるように鼻ピアスは倒れた。美影は運動神経がかなり良く、反射神経も良いので能力を使わな

くても十分強い。

「てめえ、よくも！」

「やっちまうぞ、おめえら！！！」

「泣いてもゆるさねえぞコラァ！！！」

仲間が倒されて激情した不良たちが一気に美影に襲い掛かる。

「あ、危ない！！！」

不良たちにナンパされていた少女が美影の身を案じ、叫ぶ。

ケンカ慣れしている不良たちに一人の少年が勝てるわけがないと思  
い、見ていられなくなる。

しかし美影は恐れることなく不良たちの飛び交う攻撃を紙一重で  
かわし、体勢を崩した不良たちの腹を拳でついたり、首元に手刀を  
打つなりして、全員をほとんど一撃ずつで気絶させた。

「・・・え？・・・」

その少女は美影の流れるような動きに目を見張る。

それに対し美影は何事もなかったかのように路地裏へと入ってい  
く。

「あ、あの！」

「ん？」

「あ、ありがとうございます！ 私、さっきこの人たちに囲まれて。」

その少女は助けてくれた美影にお礼を言う。  
当の本人は助けるつもりはなく、どちらかというと正当防衛のつもりだ。

「ああ、そう。ま、気をつけてね。」

気にせず進んでいく美影。

そんな彼の背中を助けてもらった少女、さてんるいこ佐天涙子は呆然と見ていた。



(ここか・・・。)

人助けをしたことをまったく気にしていない美影はこれから壊す研究所の前にたどり着いた。

先ほどとは違う、冷たい目になり、研究所全体を重力探知で視る。

(ひどいな、これは・・・。)

その研究所は学園都市における社会問題のひとつ、置き去り(チャイルドエラー)を実験動物として扱い、非人道実験を繰り返していた。

それに目をつけられ、こうして御坂美影(超能力者)が送り込まれたのだ。

重力探知で視えたものは子供たちの死体。



生きている子供たちも十分に食事を与えられず、実験を繰り返されたのか、かなり弱っているのが分かる。

美影はこのような研究所はいくつも見（壊し）てきた。

（いくか・・・。）

美影は嚴重なバリケード、分厚い壁をブラックホールで全て壊し、研究所に入ってしまった。



「はあ、 はあ、・・・くそお!! どうしてこうなった!!!!」

白衣を着たとある研究者は逃げ惑っていた。突然やってきた、名も知らない少年から。

その少年は研究所に入ってくると、この研究所を潰しにきた、といい、機器や防犯装置などを容赦なく壊し、抵抗する研究者たちも迷わず能力を使い殺していった。

そのときの少年はとても冷たい目をしていた。

「なんなんだ!! あいつは!!」

その研究者は自分が危険な目に合いそうになるとすぐさま逃げようとした。

が、出口が壊され、その行く手を阻まんとするかのように瓦礫によって塞がれていた。

言わずもがな、それは美影が誰も逃がさないように仕組んだことである。

「くそっ！　くそおおっ！！」

なんとかして瓦礫を動かそうとしたがびくともしない。

次の逃げる手立てを考えていると後ろから、コツ、コツ、と足音が聞こえる。

(・・・！！！)

足音に一瞬怯えるが居場所が気づかれないうになんとか声を出さないようし、物陰に隠れ、逃げるときにとりにいった拳銃を音を立てないようにし、構える。

(・・・来るなら来い！！　撃ち殺してやる！！)

足音が近づくにつれ、大きくなっていく。

それに伴い、拳銃を握る手に汗が出てくる。

突然、足音が止まった。

最後の足音の大きさからして相手は遠くはない。

今、飛び出すと同時に撃てば確実に殺せると思い、勢い良く物陰から出る。

「・・・あ、あれ！？　いない・・・。」

そこには足音を出していたであろう少年の姿はない。

少し気を緩めたその瞬間、

「誰がだ？」

前方ではなく後方から声が聞こえる。

それに反応して拳銃を構えるが気づくのが遅く、拳銃を持つ腕が謎の黒い物体に飲み込まれる。

「う、うわああああアアアあああ！！！！！！！！！！」

あまりの痛みに大声で叫ぶ研究者。

その腕からはどす黒く、鉄くさい液体が流れる。

「やめてくれ！！ 何でもするから！！ 頼む！！！！」

必死に命乞いをする研究者。

だがその言葉は届いていないかのように美影は表情をまったく変えない。

「うるさい。」

一言だけいい、研究者の体を全てブラックホールで飲み込む。  
後に残ったのは赤い、赤い、研究者の血、のみだ。  
美影は軽蔑するかのようにその液体を見る。

いつからだろうか、

人を殺すのに躊躇しなくなったのは。

研究者を全員消し去った後、美影は置き去り（チャイルドエラー）たちが幽閉されている建物の扉を開けた。

ドアを開ける音に怯える弱った子供たち。またつらい研究がはじまると思ったのだろうか。

「大丈夫だよ。俺は皆を助けに来たんだ。」

優しく微笑み、子供たちに言う美影。

そんな彼を見て、子供たちは少し顔を緩める。

「もう、じっけんしなくてもいいの？」

「ああ、もう大丈夫。研究者はもういないから皆ここから出られるよ。」

優しく頭を撫でながら言う美影。

一気に緊張の糸が切れたのか、喜びのあまり、泣き出す子供たち。そんな子供たちを見て、再度微笑む美影。

いつからだろうか、

人を殺した後でも微笑むことができるようになってしまったのは

置き去りたちは、その後、警備員アンチスキルによって、保護され、病人で治療を受け、養護施設へと預けられた。

その中には、すでに帰らぬものとなった子供も数多くいた。

## 背徳（後書き）

アンケート、評価 宜しくお願いします



( 2 + 6 ) + 4 (前書き)

ちよつと時間飛びます

6月

季節の変わり目であり、緑が生い茂げ、各学校で衣替えが行われることで景色は、がらりと変わる。

また、梅雨になり、雨の日や湿気が多くなり、心地悪く感じる者も少なくないだろう。

ジューンブライド

June brideというものがあるが、それは西洋での文化であり、

学生が8割を占める学園都市ではほとんどの者が関係ない。

しかし年頃の高校生にとって、恋愛は一年を通してのイベントであり、日々あの手この手で意中の異性に近づこうとしているものも多い。



「わたしと・・・付き合ってください!!」

6月の第一金曜日。

学園都市の第18学区、長点上機学園の屋上、ここにも恋愛に夢中の女子生徒がひとりいた。

目の前にいるのは思いを寄せている男子生徒。

身長180センチメートル、顔が整っていてさわやかな印象がある少年、御坂美影だ。

4月の入学式から2ヶ月、超能力者（レベル5）は超エリート高である長点上機学園でも希少な存在であるため彼らに興味を持つ者も多いため、今では学園内のほとんどの生徒に顔が知れ渡っている。今もなお勝負を挑んでくる者もいるが、誰一人としてレベル5には勝てない。

だが美影は一度も勝負を引き受けていないため、彼が能力を使うところを見たものは無に等しい。

そのため、もしかしたら第六位は弱いのではないか、と考えるものも出てきた。

「えーと、…………ごめんなさい。」

「…………そう、…………残念ね…………。」

誘いを断る美影に落ち込む女子生徒。

制服から2年生だと分かる。

「やっぱり、無能力者（レベル0）だからかな。」

「いや、レベルは関係ないし、知らなかったんですけど。」

断る理由がレベルの差だと決め込み、落ち込んだ顔になるが、美影は念頭がない美影はすぐさま否定する。

彼はもともと人に対してレベルを判断材料としていない。

それは能力が全てであるとは考えていないことや、その卑小な考えが自分を小人物としてしまうと考えているからだ。

尤も、レベルにこだわり過ぎたあまり、人間関係を壊してしまったものは学園都市には多くいる。

「じゃあ、なんで私じゃだめなの？」

「んー、なんていうか・・・自分に余裕がないって言うか・・・」

恋愛に興味がないわけではないが、今告白した人は恋愛対象に入っていないかったようだ。

うまくは言えない美影ではあるがとにかく付き合えないことが伝わったのか、その先輩は諦めた。

「・・・わかったわ、時間をとらせてごめんね。」

そういつて手を振り、校舎内に入っていく女子生徒。

美影は別に悪いとは思っていない。

だが、何か気に入らないことがあったようだ。

美影は意識を別の方向に向け、口を開く。

「いつまでそこにいるんだよ、帝督。」

屋上の給水タンクの陰に隠れていたのは、美影と同じレベル5の垣根帝督。

一連の状況を見ていたようだ。

「なんだ、気づいていたのか。」

「屋上に来たときからな。」

彼らは入学式の日知り合い、交流していき、今では下の名前で呼び合っている。

「あの先輩の何がだめだったんだ？ 顔はいいと思うが。」

「顔はともかく、性格かな？」

「今の先輩のこと知っていたのか？ レベルは知らなかったみたいだが。」

「いや、全然。初めて会った。」

「じゃ、なんで？」

首を傾げる垣根。

まさか今のわずかな会話だけで分かったとは到底思えない。  
精神系能力者なら話が別だが、その系統の超能力者<sup>レベル5</sup>は別にいる。

「あの人一昨日お前に告っていたろ。」

「・・・ああ、そういうことか。」

垣根はその一言で納得した。

告白した人がすぐ別の人に告白するというほど移り変わりが激しい、ということが美影は気に食わないようだ。

「聞いた話ではあの人は一度付き合った人の金を搾り取れるだけ搾り取ってポイ、だそうだ。」

「ふーん、断ってよかったなあ。」

レベル5とレベル0との奨学金の差には天と地ほどの差がある。レベルを気にしていたのはむしろ彼女だったようだ。

もしかしたら一方通行や削板にも手を出しかねない、いろいろな意味で美影は心配になる。

「ていうかそんなこと誰に聞いたんだよ？」

素朴な疑問だが、やはり、気になる。

美影自身、人には言えない情報網があるが、垣根にもなにかあるのだろうと思う。

「俺のファンの女の子に聞いた。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

その言葉に呆れたような表情を浮かべる。

女子との交流に積極的な垣根はレベル5の中でも取り分け人気が高い。

すでに垣根帝督ファンクラブなるものが出来ているらしい。しかもそれは他校にも広がりつつある。

実は美影にも出来つつあるのだが、本人はまだ知らない。

「んで、なんでお前はあの先輩を振ったんだよ。告白されてから聞いたんだろ？、それ。」

タラシな帝督に若干引きつつ逆に聞く美影。  
垣根も顔はいい、と言っていたからだ。

「胸が小さかったから。」

「……………聞かなきゃよかった。」

予想を遥かに上回るほどくだらない理由だったため、さらに顔が引きつる。

何も言う気がなくなったのか彼も校舎の中に入ってしまった。

「分かってないなあ、美影。胸っていうのはなあ、男のロマン……………っていない……………」

変態持論を熱弁し始めようとしたが美影がいなくなったことに気づき、口を閉じる。

もしここにファンがいたらどうなっていただろうか。

変態のレッテルを貼られる可能性もあるが、垣根の期待にこたえようとする物好きももしかしたらいるかもしれない。

（…………相変わらず話していても考えていることが読めねえやつだ。ある意味一方通行よりも厄介かも知れねえ……………そうだ、いい事思いついた。）

今だ情報が少ない美影を探ろうとした垣根はとある事を思いついた。

それはもちろん美影にとって迷惑な事に他ならない。



「ふう〜〜〜〜。」

その日の夜10時、美影は風呂から上がり、バスタオルで頭を拭きながらテレビをつける。

その時間は美影が毎週見ているドラマが始まる時間だ。

美影は一人暮らしのため、だれの目を気にすることなくすごしている為、上半身裸で脱衣所から出てくる事もある。この日もそうだ。彼は体は細いが付くべき筋肉はしっかりと付いている。いわゆる細マッチョだ。

（ん？・・・）

美影がパジャマを着終わったとき、彼の携帯になる。着信音から察するに電話だ。

携帯電話を取り、画面を見ると『垣根帝督』と映し出されている。こんな時間に電話される事は初めてだったため、不思議に思い、通話ボタンを押し、耳に当てる。

「なんだ、帝督。」

『あーもしもし、美影か？ お前明日なんか用事あるか？』

突然予定を聞かれるが、明日は土曜日。

今週は仕事も入っていなかったため、適当にパソコンでもいいじっているつもりだった。

そのため美影は暇という事になる。



「いや、何もなかったはずだが。」

『それはよかった。ちょっと明日付き合ってくれないか。』

「別に良いけど、何すんの？」

『それは明日のお楽しみだ。』

怪しい、としかいいようがないのだがあれこれと聞くのが面倒になり、美影はそれ以上何も聞かなかった。

その後、時間や集合場所を聞き、携帯を閉じ、美影はドラマに集中した。



その翌日、美影は垣根と集合場所で会い、垣根がとりあえずファミレスに誘うので仕方なく入る。

帝督は第18学区に住んでいるのだが、なぜか集合場所は第7学区だ。

そのため入ったファミレスは美影がよく知っているところで、一方通行に入学を進めたところでもある。

昼時だが、食事をする訳ではないので二人は席に着き、ドリンクバーだけを注文した。

「なにすんの？、これから。」

美影は紅茶を飲んでいる垣根に尋ねる。

電話では教えてくれなかったため、先ほどからきになっていたの

だ。

「俺とお前のふたりでナンパしようかなって。」

「はぁ？ 何言ってるの？」

わけが分からない、といった表情になる美影。

正直彼はそんな事で異性と付き合おうとは思わない。

「せっかくいいナリしてんだから、使わないともったいねえじゃん。」

「意味わかんねえ。」

帝督が言うとおり、美影も十分イケメンの部類に入る。

本人は意識していないがその気取らない性格も異性をひきつける要因となっている。

そこを利用しようとしているのだ。

「いいから外でも見ていろよ。きっとお前の好みの女もいるだろうしさ。」

「好みの女ねえ。」

美影の異性のタイプは美影自身も実は良く分かっていない。

普通が一番、とは思っているが普通、というのも曖昧で説明しにくく、また仮に普通の女がいたとしてもそれではつまらないかもしれない、という気持ちもある。

また逆に完璧と呼べるような人も面白みがないかもしれない。

外を見ようと顔を向けようとするがその向ける途中である一点に視線が行く。

店内にいるウェイトレスの女性。

決して、彼女が気に入ったわけではない。

「どうした？」

美影の異変に気づき、尋ねる垣根。

彼も美影の視線の先を見る。

「あの定員、なんかおかしくないか？」

「なんか困っているみたいだな。」

二人が言うとおりに、そのウェイトレスは見るからに困っている。

ある方向をずっと見ながら、その方向へ足を一歩踏み出そうか出さまいか、視線の状況について店長か誰かに相談しようかしまいか迷っている。

見方によっては怯えているようにも見える。

彼女の視線の先を見ようとする二人。だが、そこには座ったままでは一見することの妨げとなる仕切りがあるため、何も見えない。

二人は同時に立ち上がり、見る。

そこには4人の女子がいた。



昼時ではあるが、テーブル席を陣取っている麦野沈理むぎのしずりの前にあるものはファミレスで注文したものではなく、コンビニで購入したシヤケ弁当。

それを彼女は堂々と、遠慮なく食べている。

「あれ？ 今日のシヤケ弁と昨日のシヤケ弁はなんか違う気がするけど。あれー？」

ストッキングに覆われた足を組み直しながら、そんなことをつぶやいては首を傾げる。

同じテーブルに座っている連中はどいつもこいつも変人ばかりだ。

「結局さ、サバの缶詰がキテるわけよ、カレーね、カレーが最高。」

麦野の隣にいるフレンダという金髪碧眼の女子高生はそんな事を言っただけをいじり回していたが、缶詰りが上手く使えないのか、何かビニールテープのようなものを缶詰にぐるりと貼り付けると、電気信管を取り付けて爆薬で焼ききった。

本来はドアをこじ開けるのに使うツールだったと思う。

一方、フレンダの向かいに座っている絹旗最愛きぬはたさいあいという、ふわふわしたニットのワンピースを着た、12歳ぐらいの大人しそうな少女は、そうした変人たちの行動を一切気に留めず（良識があるとか心が広いとかではなく、そういう種類の変人なのだ。）、映画のパンフレットに目を通しながら、

「香港赤龍電影カンパニーが送るC級ウルトラ問題作……様々な意味で手に汗握りそうで、逆に超気になります。」

と、共感できる者がいそうにないことを言いながら、ひとりパンフレットに集中している。

彼女の隣にいるのは脱力系の少女、滝壺理后。たきつぼりこう

彼女は食事に手をつけず、ソファ状の席にだらっと手足を投げ出したまま、どことも取れないところに視線をさまよわせ、

「……南南東から強い信号がきれる……。」

彼女たちは『アイテム』。

表では普通の生徒のように学校に通っているが『裏』では学園都市の非公式組織で、主な業務は『上層部』の暴走の阻止。

御坂美影の『スペース』、垣根帝督の『スクール』と同等の機密レベルで扱われる集団だ。



(……………)

御坂美影はそんな変人たちの行動に絶句していた。

彼女たちのことは自身の情報操作により、大体のことは調べ上げられていた。

特に4人のなかで、リーダーを勤める麦野沈理は美影と同じ超能力者《レベル5》の一人で、序列は彼より二つ上の第4位。

十分要注意人物ではあるが、データにはない奇矯な行動を見せ付けられ、彼女たちに対する印象が変わりつつある。

そして、こいつらに関わりたくない、という考えに達した。

だが、隣にいる垣根帝督はそれらの行動に気に留めず、

「あれ、麦野じゃねえか。」

「あら、帝督。」

美影は垣根の方を向き、知っているの？、と聞くと、幼馴染、と返事が来た。

その意外なレベル5間の関係のことも美影は知らなかったようだ。美影にとって、十分変人と呼べる垣根が変人たちに近づいていくので、ひとり、取り残されないように彼もしぶしぶ付いていく。

アイテムの4人は垣根と面識があったため、特に不審に思うことはないのだが、後についてきた者の顔は見たことない。そのため麦野は若干無愛想に尋ねる。

「そいつ誰？ 帝督。」

「しがない、第6位です。」

返事が返ってきたのは初めて顔を見た美影自身。彼女たちも今まで第6位のことはまったくといっていいほど情報が入ってきておらず、今年、長点上機学園に入学したという噂しか聞いていなかったので4人とも驚いた顔をする。

「あんたが第6位……。」

「あれ？、帝督、言ってなかったの？」

「そういえば言ってなかったな。」

彼女たちの驚きように気づき、彼女たちのテーブル席の隣にある

二人用の席に垣根と座った後、おそらく全員と知り合いである垣根に聞く。

だが彼は忘れていたかのように答えた。

「で、あんた、名前は何なの？」

数秒前までノーマークだった美影に興味をもち、尋ねる。  
その質問の答えも彼女たちにとって驚くべきものだった。

「御坂美影だよ。」

「御坂！？・・・てことは第三位の親戚？」

「実の兄だよ。」

入学式の日、垣根としたものとまったく同じ展開になり、再度驚くアイテムの4人。

やはり、知っているものにとって、この事実は思いがけない事実だ。垣根はそんな彼女たちを見ながらニヤニヤしている。

麦野は何か思考しているようだが、美影は口を開き、

「俺のこともいいが、そっちも自己紹介しろよ。」

と、軽い口調で言う。

彼女たちのことは調べあげているが、そのことを話せば彼女たちと同じく変人扱いされてしまう、と思い、一応名前をきく。

「絹旗最愛です。」

「フrendだってわけよ。」

「・・・滝壺理后・・・。」

「私が超能力者第4位、<sup>レベル5</sup>麦野沈利よ。」

一人ひとり名前をいい、最後に序列を強調しながら麦野沈利が言う。

どうやら、その数字を気にしているようだ。

「で、あんた達何でここにいたの？」

「ああ、それは帝督がこれからナn――」

事のあらましを話そうとした美影だが、不意に帝督に首をつかまれ、体の向きを強引に後ろに変えられ、肩を組まれる事で遮られる。垣根は何か慌てているようだ。

「なにすんだよ。」

垣根の様子を見て、後ろの麦野たちに聞こえないように小声で言う。

「頼むから、麦野にナンパのことを言わないでくれ。・・・あいつ俺の女付き合いのこととなるとうるさいんだよ。」

早口で口止めを要求する垣根。

だが美影はそのことに対して何も言わず、

（あ、おもしろいこと聞いちゃったな。）



と、心の中でいたずら心を働かせ、悪巧みをしていた。  
そんな彼らの行動を不審に思った麦野は、

「で、なんでここにいたの？」

今度は少し声に力をこめて言う。

垣根が手を離し、二人は振り向く。垣根は無理して笑顔を作り、美影に指差し、

「なん、なんとなくこいつと第7学区で遊ぼうかなって話だったんだよ。」

明らかに焦りを表情に浮かべながら何とかして美影の言葉につなげようとした。

麦野はやはり不審におもいつつも尋問する気にならなかったのか話題を変える。

「あ、そうだ。第6位、あんたメールアドレスよこしなさいよ。」

「ん、いいよ。帝督送っというて。」

第4位にアドレス交換を要求されたので、レベル5のつながりを増やしといて損はないと思い、この場で二人のアドレスを知っている垣根に二人にそれぞれアドレスを送るよう注文する。

「やだよメンドクサイ、自分たちでやれよ。」

「そういえばこのあと、お前の予定通りナ——」

「よし、少し待ってろ。すぐ送る。」

美影にわざと……うっかりばらされそうになったのでまた言葉を遮り、急いで携帯を取り出し、アドレスを転送する。

その狼狽した垣根の行動をみて、美影は心の中で思う。

（……これ、使えるな。）

「そういえば、お前ら『アイテム』はこんなとこで何やってたんだよ。」

麦野に感ずかれる前に話題を待ったく別の方向に向ける垣根。

正直さっきまでの彼女たちの状況は食事以外のなんでもないように見えたのだが、本当は違う目的があった。

「実はこの後、仕事があったね。その打ち合わせだったのよ。」

『仕事』という単語に美影は疑問を持たないように見えたので、麦野は彼もなにかやっているのだと予想する。

それ以前に『裏』と何のかかわりもなかったら例えレベル5といっても情報がほとんど出回らない、なんて事にはならないのだが。

美影と帝督は適当に相槌を打つが、麦野はとあることを思いつく。

「そうだ、あんた達も手伝いなさいよ。」



「はあ、なんでこんなことになったんだ？」

「まあそんな風に超落ち込まないでくださいよ。」

「結局、御坂と私たちはは麦野に上手いこと使われたってわけね。」

「大丈夫。私はそんな利用されたみさかを応援してる。」

（うれしくねえよ。）

美影の近くにいるのは『アイテム』の麦野を除く絹旗、フレンダ、滝壺の3人が彼の後に続けて言う。

彼女たちの依頼は先日の実影と同じ、研究所の殲滅。場所は第10学区。

その研究所は大きく二つに分けられ、主に研究者が研究をするための施設と実験用の置き去りたちが隔離されている施設。

そのため、二手に分かれよう、となったのだが、麦野と垣根の二人がが研究施設、その他が収容施設というようになった。

「で、あの二人の関係についてどう思うってわけよ、御坂は。」

金髪碧眼のフレンダが楽しそうに言う。

彼女たちも気づいているようだ。

「両思いだけど互いになかなか気持ち伝えられずにただ時間だけが過ぎ去ってしまう幼馴染って言う恋愛ものに使い古されたようなパターン。」

「超同感ですね。麦野って意外と子供っぽいところがありますからなかなか思い切ることが出来ないんですよ。」

アイテムで最年少の絹旗に子ども扱いされてしまう。  
もし本人がこの場所にいたら何が起きていたであろうか。

「そんなに子供ってわけでもないだろ。レベル5でも最年長なんだから。」

「むぎのはゲームで一度失敗したらエンディングを見ても納得しない。」

「それに寝るときはボロボロのぬいぐるみを抱いてないと寝れないってわけなんだからほんと笑えるよね。」

「・・・まじかよ。」

意外な事実が次々と発覚していき、ここでも面白いネタがつかめた、と思う美影。

もう研究所のことなんてどうでもいいとも思ってしまうほどの驚きだ。

「そんなこと俺に言って大丈夫なのかよ。」

一応心配しているように見せるため問う。

「御坂が何も言わなければ超問題ありません。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「無言!?!」

絹旗の言葉に何も返事がないので一気に心配になり、フレンダが声をあげる。

他の二人も慌てているようだ。

「超言わないで下さいよ。」

「……あ、なんか来た。」

「第6位~~~~~。」

まるで殺されるかもしれない、といった表情になる3人。  
だが美影は目の前のものに警戒していた。

「……パワードスーツ駆動鎧か。」

パワードスーツ  
駆動鎧

服のように着込むことで、人間の身体能力や動作を外側から強化する機械の総称だ。

タイプは様々だが、彼らの目の前にあるのは研究所内でも動きやすい小型のものだ。

おそらく守衛用に研究所に所有されているのだろう。

『なんだお前たちは。』

駆動鎧につけられたスピーカーから中に入っているおそらく男性の声が聞こえる。

監視カメラに写った怪しい集団を排除するために出てきたのだ。

「あー、ここ潰しに来ました。」

シリアスな雰囲気などまったくない声でどうでも良さそうに答える美影。

その駆動鎧の中の男はそんな彼の態度に激怒する。

『なら、今すぐ消えろー！！』

腕を前に出し、そこにはマシンガンのような銃口が出てくる。

だが彼よりも早く一人の少女が動く。

「これくらい私だけで超十分です。」

絹旗の能力はレベル4の『オフエンスアーマー窒素装甲』、空気中の『窒素』を自在に操ることができ、その力は極めて強大で、圧縮した窒素の塊を制御することにより、自動車を持ち上げ、弾丸を受け止めることができる。

そのため彼女は恐れず突き進み、駆動鎧に一発殴る。

その威力は絶大で、それだけで駆動鎧は二つに割れた。

「おおー！ー！。」

「これくらい超朝飯前です。」

美影は彼女の行動と能力に賞賛し、声をあげる。その声を聞き、絹旗はうれしそうだ。

「・・・っ、くそ、このままではすまんぞ！！」

駆動鎧から出てきた男は這うようにして動き、壁にあるスイッチをたたく。

そこにあるシャッターが開き、出てきたのは大きなバズーカのよ

うなものだ。

「絹旗、あれ止めれる？」

「ちょっと超無理です。」

（……とにかく無理なのか。）

絹旗のどこがおかしな表現に不思議に思うがとりあえず自分がやるしかない、と思ったので一歩前にでる美影。

彼を見て、能力が見れる、と思ったアイテムは後ろに下がり、観察を始める

「これでもくらえ!!!」

男によって放たれたバズーカは御影に一直線に向かう。

だが彼が作り出したブラックホールによって跡形もなく吸い込まれた。

驚き、逃げようをする男。

美影は走り出した男にかかる重力を操作し、男の体を壁に打ち付け、その衝撃で気絶した。

「「「おおー！ー！。」「」」

今度はアイテムの3人が初めてみる美影の能力に声をあげた。

見張りは一人だったのか、垣根と麦野が始末したのか、そのあと

誰も4人の前に立ちふさがる者はいなかった。

無事、幽閉されていた子供たちを助け、研究所を出る。

そのあと、麦野となぜか腰を押さえている垣根と合流する。

後で話を聞くと、女って怖いな、としか返ってこなかった。

何があつたかは知らないがとにかくそれで女癖が直ればいい、と美影は思ったがそれはないだろう、とも同時に思った。



垣根と『アイテム』の4人と別れたあと、美影は小腹が空き、コンビニに立ち寄っていた。適当にチキンを買い、店を出ようとしたとき、ポケットの携帯のバイブ機能が働く。

見ると、メールで、差出人は今日帝督からアドレスをもらった麦野沈利からだ。

メールを見ると、書いてあつたことは、

f r o m 麦野沈利

s u b 無題

明日、今日と同じ時間に同じファミレスに来ること。

必ず一人でよ。

——— E N D ———



と、一方的な内容であるが、明日は日曜日で、特に用事もなかったので、適当に返事のメールを打つ。

コンビニから出ながら、送信ボタンを押したその瞬間、

横から猛スピードで走ってきたツンツンした短めの黒髪の少年とぶつかった。

( 2 + 6 ) + 4 (後書き)

アンケート、評価 お願いします

## 内幕

「あー、くそ、なんだこれ、とにかく不幸ーだー！ー！ー！ー！ー！」

「まちやがれ、逃げ足大王！ー！」

第7学区に住む少年、上条当麻<sup>かみじょうとうま</sup>は大声を張り上げながら全速力で逃走している。

彼一人に対して追いかけているのは7人。

なぜこんなことになったかというとゴミ箱に投げ入れようとした空き缶が風のせいなのか、手がすべたのか、大きく起動がずれ、近くにいた不良の頭に当たった、という普通ではありえないともいえることが起こったからだ。

彼は生まれつき、極度の不幸体質で、こういうことはよくあるのだから驚きだ。

「へっへーん！ 誰が待つものですか！」

足に自信があるのか、余裕があるのか、そんなことを後ろに向かっている。

だが、その軽率な行動をしたために、前方のコンビニから誰かが

出てきたのに気づかず、そのまま直進してしまう。

「うわっ！　ちょっ、そげぶ！！」

「ん？　おっとっと。」

コンビニから出てきた少年は横から走ってくるものがあることに気づき、とっさに回避しようとするが、避けきれず、肩があたってしまったため、自分は転ぶことはなかったが、逃走中の上条当麻はその衝突でバランスを崩し、盛大に倒れてしまった。

「いたたた、あー不幸だ。」

「おい、大丈夫か？　・・・ん？」

安否を尋ねるが、その少年を追いかけていた不良に自分も囲まれていることに気づく。

「へっへっへ、馬鹿め、誰かにぶつかってやんの・・・って、ダメエは！！」

上条の足が止まり、下品な笑いをする不良の一人。  
だが彼は上条に肩をぶつけられた少年、御坂美影に見覚えがあった。

「ん？　あーあ、またお前か。」

美影の目の前にいるのは、以前、少女を取り囲んでいた金髪に鼻ピアスの不良だった。

その不良の周りにいたのは彼と同じ、以前、美影に伸された不良

たちばかりだ。

「テメエ、ここで会ったら百年目、今度こそぶっ飛ばしてやる!!」

不良たちの痛めつける対象が缶をぶつけた者から美影に変わり、  
今にも飛び掛りそうだ。

（はぁ・・・面倒だなぁ・・・  
・・・物騒なもの持ってるし・・・  
ん？）

重力探知で不良たちの所有物を探っていると、とあるところが気になった。

不良たちは容赦なくナイフやスタンガンなどを美影に向けながら襲い掛かる、が、また美影に全て躲され、またほとんど一撃ずつで気絶に追い込まれた。

彼は無闇に能力を使うことを嫌い、また体は鍛えられているため、不良への対処はこのようなパターンが多い。

「ははは、どこの誰かは知りませんが、ありがとうございます。」

その一瞬の出来事に驚いていた上条はお礼を言う。  
ぶつかったのが美影だったのは不幸中の幸いだったようだ。

「大丈夫か？」

右手を差し出し、地べたに座っている上条を立ち上がらせようとする。

上条は彼の手を掴むが、掴んだ瞬間、パシン、という音が鳴り、  
美影の重力探知がかき消された。

「・・・え？」

「・・・おもしろい右手だね。」

うまく状況が飲み込めていない上条に対し、美影はどこか納得したようだ。

「なにをしたんでせう？」

「いやー、さっき俺の能力に反応しなかったから気になってね。」

美影が先ほど不良たちの持ち物検査をしていたとき、後ろにいた上条の右手だけはなぜか視えなくて、まるでそこだけ何も無い空間のようになっていたのだ。

重力を読み取る美影が探知できなかったのも、まさか重力が右手だけにかかっていない、とは思わないので、もしかしたら能力に反応しない能力か何かか、と思い、能力を発動しながらそれに触れてみたのだ。

「まさか本当に能力を打ち消すとは。」

「ははは、なんでも俺の右手はイマジンプレイカー幻想殺しって言うらしく、異能の力なら打ち消すんだよ。」

（異能の力なら、ねえ。）

美影は彼の右手に興味をもち、後で書庫バンクで検索ハッキングしてみようかな、と考えていた。

「あ、名前がまだだったな。俺は上条当麻、高1だ。」

「御坂美影、同じく高1だ、宜しく上条。」

二人は再度、右手で握手を交わした。



（イマジンプレーカー  
幻想殺し、か・・・。）

美影は上条と別れてから、帰宅し、パソコンの前で思案していた。  
目の前の画面に現れているのは、

上条当麻      l e v e l      0

（・・・アレイスターが隠そうとしているのか？ 現に俺の能力  
を打ち消したのにレベルが0なんてありえない。もしかしてあれ  
も・・・）

美影は目にも止まらぬ速さでキーボードを弾き、次々とあらゆる  
データに潜り込むが、彼の右手に関する記述は何もない。

幻想殺しの実験を行われていないのか、意図的に行われないう  
にされているのか、はたまた知る者がいないのか。

美影はハッキングをやめ、ふうふう、とため息をつく。

彼が調べようとして、調べることが出来なかったのは今まで片手  
の指ほど数はない。そのため、もやもやとしたものが彼の心に残る。  
あきらめ、違うサイトでも見ようかな、と思ったが、やはり気に

なってしまう。

そこで、ある手段をとることにした。

靴も履き、玄関から出て、鍵を閉め、周りに誰もいないことを重力探知で確認したあと、ワームホールを目の前に作り出し、その中へ入っていった。



「おや、招待はしていないはずだが。」

「そう堅いこといわないでくださいよ、アレイスター。用件は分かっているでしょう？」

美影がワームホールで移動した先は、アレイスターIIクロウリーがいる窓のないビルの中。

この人なら確実に何か知っているだろう、という結論にしか達しなかったからだ。

「上条当麻、幻想殺しのことか？」

「ええ。」

やはり、あの握手を<sup>アンダーライン</sup>滞空回線で見っていたようだ。

そしておそらく美影がここに来ることも予想していただろう。

「君といえど詳しくはいえない、が、彼は私の『プラン』に大きく関わっているとは言っておこう。」



「・・・やっぱりねえ。　もしかして『魔術師』とも接触させるつもりですか？」

「いずれな、君の手をかしてもらおう時も来るだろう。」

「・・・いやですよ『魔術』とこれ以上関わるなんて。　土御門つちみかどがいるでしょう。」

「彼はまた違うところで働いてもらうことになっているのだよ。」

先ほどから出ている『魔術』という単語。

世界一『科学』が発達している学園都市にとってそれはオカルトと呼ばれ、空想のものでしかない。だが、それは実際に存在している。

土御門、というのは魔術サイドの人間で学園都市・イギリス清教などから依頼を請けている多角スパイで、一方通行も所属している『グループ』や魔術サイドの『必要悪の教会』にも所属している。また上条と同じ学校に通っていることを美影は先ほどのハッキングで知った。

彼がイギリスと日本を行き来する際にあたって、足が付かないためにも美影のワームホールが利用されることもたびたびある。

そのため、美影は『魔術』の存在を知ってしまったもののだが、詳しくは知らない。

「学園都市の外で何かする気はないんですけど。」

「なら君には学園都市内で動いてもらうとしよう。」

美影の反論は想定内であつたらしく、それ以上アレイスターは何

も言わなかった。

だが、確実に今までなかったことで動かされることになるだろう、と美影は思った。

「はいはい。わかりましたー。」

適当に返事をした後、美影は元の場所に戻った。



（あ、そういえば明日麦野に呼ばれていたっけ。）

別れて10分くらいで来たメールのことを不意に思い出す。

やたら一人で来ることを強調していたみたいだ。

用件は垣根のときと同じく聞いていないが、こちらのことは大体の予想が付いていたため、不審に思うことはなかった。

## 内幕（後書き）

アンケート、評価 お願いします

上条当麻、幻想殺しについて、アレイスターからわざわざ話が聞いた日の翌日。

御坂美影は昨日と同じファミレスへと歩いていった。

(梅雨だというのにここ2、3日雨が降らないなあ)

空を見ながら思う。

水溜りはあちこち見られるが、どれも新しいものではない。

学園都市の天気予報は人工衛星『おりひめ1号』に入れられた高

性能並列コンピューター、

ツリーダイアグラム

シミュレーション

樹形図の設計者によって、秒刻みで未来予測が行われるため、予報というよりは予言というほうが正しいだろう。

そのため、この日曜日にも雨が降らないとテレビで言っていたので、念のため傘を持ち歩く、なんて者は学園都市にはいないだろう。

美影がファミレスに入るとすぐに麦野沈利が軽く手を振っているのが見えた。

待ち合わせということを定員にいったのか、彼女は一人でテーブル席に座っていて、その上には昨日と同じ様なシャケ弁は置いてなく、紅茶だけがある。

(.....)

美影が麦野を見つけたあと、ふと視線を右に向けると違うテーブル席に昨日少しの間、行動を共にした3人を見つけてしまった。

麦野を尾行してきたのか、サイズが合っていない大きな帽子や派手なサングラスをしている。

どうやらあれだけ目立つ格好をしているのに彼女にはばれていないようだ。

何も言わず、麦野の前に座る美影。  
すると麦野から話しかけられた。

「ちゃんと一人で来たわよね？」

念を押すように言う麦野。

彼女に対し、美影は、ふう、と小さくため息をつき、

「俺はな。」

と、麦野の後方の席を指差しながら一言言う。

麦野が疑問に思い、後ろを見ると、そこには美影に指差されて慌てる、『アイテム』の3人がいた。



「あんたたち、変なこといたら承知しないからね。」

「はい」

美影の両隣に移動した絹旗とフレンドが同時に返事をする。

滝壺は麦野の隣で昨日と同じくだらっと手足を投げ出しているが、興味を持っているような顔をしている。

3人は麦野の不審な動きを偶然見つけ、付いてきたのだ。

美影は、俺も何か気に食わないことをいったら何かされるのか、と少々不安になる。

麦野は3人に口止めはしたあと、3人がいるせいなのか、もともとすぐに言えるようなことではないのか、何も言わず、紅茶が入ったカップに口をつける。

そんな麦野に見兼ねたのか、御影がはぁー、とまたため息をし、

「・・・帝督の事か？」

昨日はこの場において、今日いない唯一の人物の名前を言う。

それが図星だったので、麦野は紅茶をのどに詰まらせ、むせる。

「ななな、なんでそれを!？」

動揺し、声のトーンをずらしながら大声を出す。

それをみた4人はリレー方式で次々と言う。

「見ていればいやでも分かる。」

「やっぱり超その通りだったんですね。」

「結局、麦野は第二位にゾッコンってわけよ。」

「大丈夫だよ、むぎの。私はそんなゾッコンなむぎのを応援してる。」

直接3人に言ったことはなかったのだが、自分の気持ち全員に

ばれてしまっていることにショックを受ける麦野。

コホン、と息を整え、なんとか冷静な表情を取り戻そうとするが、すぐには出来ない。

「ま、そういうこと。で、学校ではどうなの、あいつは。」

頬を少し赤く染め、テレながら何とか本題に入った。

学校での事は帝督は幼馴染の麦野には何も言っていないようだ。

「まあ、なんていうか、とにかく女タラシだね、あいつ。昨日もナンパしようぜ、なんてここで言われたし。」

実際、言葉では言い表せないほど帝督はあらゆる女子に好意を持たれていて、最近では週4回は告白される。

その分、男子からの別の意味での熱い視線が耐えないのだが。

「はあ、やっぱりね。昔からそうなのよねえ。」

さらっと、昨日帝督が言わせまいとしていたことを言ってしまったのだが、特に気にかけず、どこか遠いところを見て、物思いにふけながら言う麦野。

彼女を見て、どういつて励ませばいいのか分からなくなった美影はとりあえずコーヒーを一口すすする。

「あいつのファンクラブ、うちの高校にもできているのよねえ。」

麦野が通っているのは長点上機学園と同じ、学園都市の五本指の一つに入る名門校。

そんなところにも広がっているのか、と美影は呆れた顔になる。

「私も入ったほうがいいのかなぁ・・・。」

すっかり顔が暗くなり、弱音を吐くように言う麦野。  
だが美影はその考えを否定する。

「んなもん、駄目に決まってるだろ。」

「なんで？」

当たり前のことのように即答されたので、聞き返す。

「ファンクラブってのは少しはそいつに近づけるだろうけど所詮ファン止まり。彼女になることなんてまずないだろ。」

美影の言うとおり、アイドルのファンクラブに入ったからといって特別その人に近づけるわけではない。

一瞬振り向いてもらったときに全力で手を振ることや、偶然近くに来たときに手に触れてもらうことや、なんとかしてサインを入手することしか出来ない。

「だいたいアンタは幼馴染っていうほかにはない特典があるんだから、もう少し堂々としたほうがいいんじゃないの？」

美影の言葉に勇気ももらったような顔になる麦野。

さらに美影は言葉を付け加える。

「あと、帝督は何度も告られているけど、一度もそれを受け入れたことがないね。何度も適当に女を捕まえているけど本気になったことは一度もないみたいだし。」



これも嘘ではなく真実だ。

美影からは帝督は麦野以上に自分にあつた女がいないことを確かめているように見えているのだが、それはあえてこの場では言わない。

「……………そうね、なんだか自信がでてきたわ。」

「それはなにより。」

ニツ、つと微笑む麦野と美影。

美影は二人を応援しているように見えるのだが、実際には面白そうだからいろいろ言っている、というなんとも失礼な心情だった。

だが、少なからずハッピーエンドを望んでいるだろう。

アイテムの三人も笑顔で何か話している。

すると、麦野が突然話題を変える。

「実はね、今日あんたを呼び出したのはもうひとつ理由があつたのよ。」

これは予想できなかったのか、なんだろう？、と首を傾げている。

「あんたって超電磁砲レールガンの兄だったわよね。」

「そうだけど？」

突然、美琴のことが話しにあげられ、やはり疑問に思う美影だが、まさか、と、とあることが心に浮かんた。

「あんた、私と勝負しなさい。」

そのとき、美影は麦野の顔が自分が一番良く知っている少女の顔を重なって見えた。



「おーい、もういいーかー？」

「はあ、はあ、はあ、・・・そうね、これくらいにしましょ。」

美影は15メートル前方で息を荒くしながら立っている麦野に声をかけ、彼女は諦めたようにそれを了承した。

二人がいるのはとある河川敷。

いつもは平穏な場であり、カップルや登校する生徒が見られるのだが、今さっきまでは超能力者同士の戦場と化してしまったため、ところどころの地面は吹き飛んでいたり焼き焦げてしまっている。

その河川敷の土手の階段に『アイテム』の3人は座っていて、その戦闘を見ていたため、驚いている。

自分たちが良く知る麦野<sup>レベル5</sup>沈利がまったく歯が立たなかったことに。

「で、どうなのよ。」

なぜこういう状況になったかという<sup>レベルガン</sup>と第3位を誰よりも知っているであろう御坂美影に第4位と戦うこと<sup>自分</sup>でどちらが上かを見比べてもらおうということになったからだ。

「超電磁砲と私、どっちが強いのよ。」

麦野の質問に、うーん、と頭を抱える美影。  
そこで、ひとつの結論に達した。

「万が一、二人が戦ったとしたら、おそらく・・・引き分けかな。」  
「どうして？」

その答えに不満があるのか、眉を顰める。  
そして、美影は仮説を言い出した。

「お前の原子崩しは確かに強力だ。威力だけなら美琴の超電磁砲レールガンより遙かに上だ。だが強力すぎるためわずかながらタイムロスが生じていて、そこが少し穴になっているかな。あと超電磁砲に比べて、応用が少なすぎる。」

「・・・・・・・・・・。」

麦野はそれについてなにも言い返すことが出来なかった。まさしくその通りなのだから。

そこに美影は、これは確証はないけど、と前置きして付け加える。

「超電磁砲も原子崩しも能力の原理は待ったく違うけど元々は両方とも電子を操作する能力だから、お互いの能力に干渉して攻撃を逸らすことができるんじゃないかなあ。」

麦野沈利の能力、原子崩しメルトダウンは本来『粒子』又は『波形』のどちらかの性質を状況に応じて示す電子を、その二つの中間である『曖昧なまま』の状態に固定し、強制的に操る、という能力だ。

そのため、電撃使用の頂点に君臨する超電磁砲エレクトロマスターとは根源は同じた

め、美影の仮説は強<sup>あなが</sup>ち間違っていないといえる。

「・・・やっぱり、気に入らないけど仕方ないわね。」

「そんなに序列が気になるのか？」

不服そうな麦野に尋ねる。

美影は麦野が序列を気にしていることは気づいていた。

「年下のくせに序列が上つてのが気に入らないのよ。」

一番年上のくせに、と思っ<sup>ム</sup>たが、そんなこと言ったらまた原子崩<sup>ビー</sup>しが飛んでくるかもしれないので控える。

「十人十色なんだからいいだろ。」

それくらいのことしか言えなかったが、麦野はそのことについて何も訴えなくなり、

「まあ、いいわ。大覇星祭にでも決着をつけようかしら。」

「・・・殺すなよ、俺の妹を。」

捕らえ方によっては物騒なことをいう麦野にそうなるとは思わないが、一応忠告しておく。

そこで話しは終わり、

「今日はありがとね、無理言つて。」

本当にそう思っているのかは疑わしいが、先ほどよりも顔色が良

くなっているように見える。

だが、麦野は美琴に敵対心を持っているのと同時に先ほどまったくかなわなかった美影に齒がゆい気持ちを抱いていた。

それに気づかない美影ではないのだが、そこに触れないほうがいいと判断した。

その後、『アイテム』の4人は立ち去り、美影だけが河川敷に残された。

「・・・序列、か・・・・・・・・。」

最後に美影が口にした言葉は誰にも届かなかった。

( 2 × 4 ) ↑ 6 (後書き)

アンケート 評価 お願いします

## 偶然（前書き）

週間アクセス20000以上！

とてもうれしいです

## 偶然

『ブラックホール 発動時間 0.1156秒

体積 152立方メートル

制御率 99.278パーセント

総合評価 5

』

研究所内に機械音が流れる。

この日は美影の身体検査システムスキャンが行われている。

彼の能力が強力であることや、本人の希望もあって、学校では行われず、美影専用の研究所で行われるため、平日なので学校は午後から早退だ。

彼の研究所は能力が重力の操作ということもあってか、航空・宇宙開発分野のために占有させている第23学区にある。

第23学区というのは、一般学生立入禁止の特殊な学区ではあるのだが、彼は特別扱いされている。

「おつかれさん。今日のいいデータが取れたよ。」

美影の担当研究者が身体検査を終えた美影に笑顔で声をかける。彼の後ろには美影が知らない女性が立っていた。

「その方は？」



その女性に気づいた美影は担当研究者に尋ねる。  
その女性は白衣を着て、顔は整っているのだが、目の下に隈が出来ており、見る人に残念美人という印象を与える。

「始めまして、きやまはるみ木山春生です。今日はとても興味深いものを見させてもらったよ。」

白衣のポケットから手を出し、握手を求めたので美影は、どうも、と言言ってその手を握り、うしろにいる担当研究者を小さくにらむ。

美影は無関係者に能力を見られるのは嫌っているからだ。

「ああ、彼女は私の知り合いでね、十分信用できる人だ。」

美影の心情を察し、弁明する。その言葉で美影は了承したようだ。彼の研究所の職員は一人ひとり美影自身が見定めているため、彼が信用できない人物はここにはいないからだ。

「超能力者の能力を間近で見るのは初めてでね。いろいろと参考になったよ。」

「お役に立てて光栄です。木山さんの専攻は何なんですか？」

自身の担当研究者が連れてきた木山にわずかながら興味を持ち、尋ねる。

「私の専攻はA I M拡散力場だ。」

「俺たち能力者が無自覚に発している微弱な力のフィールドのことですか？」

「ああ、そうだ。よく知っているね。」

木山は少し驚いた顔をする。

大抵の学生は自分の能力については調べようとするが超能力そのものについて知ろうとする者は思いのほか少ない。

それに引き換え美影は自分の能力以外に関する資料を読み漁るため、そんじょそこらの研究者より博学多識である。

だが、レベル5の頭脳をもってしても専門家には敵わないため、謙遜し、

「いや、それほど知っているわけではありませんが。」

「君が研究に協力してくれれば私としてはうれしいのだがね。」

「はは、出来れば避けたいですね。あまり脳を弄られたくないですから。」

「そうか、それは残念だね。」

具体的に木山がどのような実験をしているのかはわからないが、この研究所以外で実験をしたくはないため、愛想笑いを浮かべ、断る。

「なら、一つだけ私の質問に答えてくれないか？」

隈がある瞳に力が入ったようになり、木山は諮問する。

彼女の表情の変化に気づき、美影は気持ちを切り替え、

「いいですよ。」

「君は超能力者として学園都市このまちをどう思う？」

この上なくシンプルな問いかけではあるが、いざ聞かれると難渋してしまう。

しかも美影は学園都市の『裏』とも関わっているため、普通の学生よりも『知って』しまっている。

美影は窓からみえる景色を眺め、木山の眼を見て、口を開く。

「とても魅力的なところですが、・・・時には残酷な現実を見せ付けられますね。」

「・・・ほう、そう思うかね。」

「・・・それに、・・・学園都市このまちには、知らないほうがいいことが多すぎますね。」

「・・・！」

木山は息をのむ。美影に、より正確には美影の眼に。

彼の眼はとても学生とは思えないほどの事を語っているように見えた。

レベル5だから誰よりも恵まれている、と今まで思っていたのがそれは大違い。

この街の頂点だからこそ、他の学生が知り得ない現実を見せ付けられ、苦悩しているのだと今までの浅薄な考えを改める。

「・・・そうか、とても参考になったよ。ありがとう。今日はここで帰らせてもらおうでしょう。」

「もういいのかね？」

後ろにいた研究員が木山に尋ねる。

この後もお互いの研究成果について話し合うつもりだったのだ。

「ええ、私にはやるべきことがあるので。」

彼女はそう言い、研究所から出て行った。

そのときの彼女の顔は意味深な微笑を浮かべているように見えた。

「今回の身体検査は今日で終わりだ。　また今度も頼むよ。」

「はい、では、また。」

美影も研究所を後にした。



（・・・そういえば、彼の名前を聞いていなかったな。　第6位とは聞いたのだが。）

木山春生は先ほどの印象深かった少年の名前を知らないことに気づいた。



美影は研究所を出た後、食料品をスーパーで買おうとしたのだが、財布の中には英世さんが二人しかいないことに気付いたため、お金をおろそうと近くの銀行へと足を運んだ。

彼は他のレベル5のように金銭感覚は麻痺していないのだが、何度も銀行に来るのも煩わしく思うため、いつも必要以上おろしている。

（今日、なに食べようかな。）

彼は自炊派で、ジャンルを問わず、大抵の料理は出来、しかもかなり上手い。

無事、おろしたお金を財布に入れ、夕飯の献立を考えながら銀行から出ようとしたその時、

パン、と一発の銃声が銀行内に響いた。



『白井さん、犯人は拳銃を持っています！ 気を付けてください！』

「わかりましたの、初春！」

とある銀行に強盗が入ったと情報が入り、ジャッジメント風紀委員である少女、しらいくろこ白井黒子は相方である初春飾利から電話で情報を得ながら天を駆ける。

天を駆ける、というのは彼女は空間移動能力者の大能力者（レベル4）であるため、自分の体を転移させ、いち早く現場に駆け付ける。

尤も、彼女がレポート出来る最長距離は81.5mのため、何  
度も演算する必要がある。

「風紀委員ですの！！ おとなし・・・く・・・。」

銀行内に空間移動し、拳銃を右手に持ち、左手で人質を逃がさな  
いようにしている強盗犯に  
決め台詞を言い、降伏を呼びかけようとしたのだが、途中で言葉を  
止めてしまった。



(・・・どうしてこうなった。)

美影は意気消沈していた。

彼の顔のすぐ横には物騒な鉄の塊があり、彼は男の左手で行動を  
制限されている。

つまり美影は今、人質となってしまっているのだ。

本来人質とは力が弱い小さな子供や女性が適宜であるのだが、美  
影は十分力があり、体も小さくない。

だが、美影は銀行強盗がした威嚇射撃を無視し、銀行から出て行  
こうとしたため、強盗犯に目を付けられ、このような状態に至って  
しまったのだ。

おそらく強盗犯も人質のミスチョイスには気づいているだろう。

そこに学園都市の事件には欠かせないキャスト、風紀委員が参入

してきた。

（おっ、風紀委員が来たか。）

美影はその新来者に気付く。

その気になればいつでも抜け出せるのだが、彼は椿事<sup>ちんじ</sup>を楽しむ癖があるため、観察しようとする。

だがその風紀委員を見ると、見覚えがあった。

「風紀委員ですよ！！ おとなし・・・く・・・。」

彼女も人質に見覚えがあったため、言葉を詰まらせる。  
無言の時間が流れ、

「あ、あなたは！！」

（・・・なんでこいつなんだ・・・。）

二人は思わぬ状況で再会した。

立場を忘れ、声を上げる白井。だがその言葉の客体こと美影は全力で萎えていた。

「あなたはあの時の！！」

「人違いです。 トニカク、タスケテクダサイ。」

「間違いなくあの強盗の——」

「何だテメエら！！ この状況分かってんのか！！」

二人で勝手に会話？、をし始めてしまったので激怒する強盗犯。  
今にも撃ちかねない状態になり、白井は焦るがその拳銃に最も近くに  
いる美影には恐怖などなく、このあとどうやって逃げようか、  
というその場面に不相応なことを考えていた。

強盗犯は目の前の風紀委員を始末しようと拳銃をむける。

白井は焦ることなく、その状況を打破すべく、太もものホルダー  
に仕込んだ金属矢を拳銃がある座標に転移させ、使用不可にさせる。

「あ、ああ！？ なんじゃこらあ！！？」

突然自分の手にある拳銃に金属矢が生えたことに、戸惑い、引き  
金をカチカチ、と何度も引くが、一向に実弾は出てこない。  
使えない、と判断し、その鉄の塊を投げ捨てる。

「くそお！！」

彼はそれ以外の武器を所有していなかったのか、逃亡という行動  
を選択し、人質の美影を押しつけ、風紀委員を撃退しようとする。

相手は能力者といえど、中学生の少女。喧嘩が日常茶飯事スの武装  
無能力集団である自分ならなんとかなると感じていた。

だがそれは驕りでしかなかった。

その少女に拳を振るった瞬間、少女は消え、拳は空を切る。

「ああ？」

どこにいった、と困惑している中、後頭部に強い衝撃が走り、倒  
れる。

彼女は上方に転移し、ドロップキックを繰り出したのだ。小柄と



はいえ、一点へ全体重をかければその衝撃は凄まじい。

そして倒れた強盗犯に追い打ちをかけるように衣服に先ほど同じ金属矢が突き刺さり、磔にされてしまう。

「これ以上抵抗するのなら、これを体内に直接・・・ですよ？」

そこで彼は戦意を喪失した。

「あーあ、やっと放してもらった。」

呑気な声で人質であった少年、御坂美影が歩いてきた。

白井は風紀委員に支給されている手錠を取り出し、かける

「・・・え？」

美影の手に。

「は？、何してんの？」

自分はかけられる対象ではないと主張するが、

「今度は逃がしませんの。おとなしく連行されて下さい。」

（あーどうしようかなあ。）

その気になれば手錠の一つや二つ、簡単に壊せるのだが、ふと、自分の服装を見る。

名門、長点上機学園の制服だ。

今逃げてでも風紀委員なら学園の個人写真つきの名簿を見れるため、  
今逃げてもしずれ捕まる。操作もしてないため美影のもしかっ

と。

しかも今回は監視カメラにしっかりと映ってしまったため、調べる手段はいくつかある。

無駄な抵抗は止め、おとなしく、

(まあ、いいや)

白旗を上げた。



「まさかあのような形であなたと会うなんて思いもしませんでしたの。」

「まったく、ホントだよ。」

風紀委員第177支部

第7学区にあり、白井の所属先である。

白井は調書にペンを走らせながら言う。

その場にいるのは二人だけではなく、あの事件で人質となっていた少女、初春飾利も白井の隣に座っている。

彼女は白井と共に支部に來た少年があの時自分たちを文句ひとつ言わず助けてくれた者だとわかると目をキラキラと輝かせながら見ている。

その視線は美影には少し痛く感じられていることは言うまでもない。

「それで、」

白井は突然真剣な顔つきになり、

「あなたの名前を教えてほしいですの。」

美影はあの事件と同じくいまだ名乗っていない。

そのため、白井の調書には一つだけ空欄ができてしまっている。

「・・・言わなきゃダメ？」

「当たり前ですの！」

なぜ美影が名前を言わないのかというと目の前の少女が常盤台中学の制服を着ているからだ。

名前を出せばおそらく、というよりほぼ確実に『あの少女』が話題に上がる。白井が知り合いなのかは知らないが彼女が知っていることは間違いないだろう。

いま騒がれるよりあとで勝手に調べてもらえばいいと思うのだが、そうはいかないようだ。

仕方なく観念し、

「名前は、」

言おうとしたその時、

「黒子！、暇だから遊びに来たわよー。」

思わぬ訪問者が来た。

## 偶然（後書き）

アンケート、評価 お願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6696y/>

---

とある六位の無限重力<ブラックホール>

2011年11月29日20時53分発行